

GEORGE GISSING

by

MASANOBU ODA

TOKYO

KENKYUSHA

1933

は し が き

思い出すのは鳥打帽子の所謂受験生の頃のことである。始めて僕に、ギッシングの名を教えて下さったのは、確に野上先生であったと記憶する。場所は法政大学の予備校で、本は黄色い薄っぺらな「ヘンリ・ライクロフトの手記」の「春」の部であったと思う。静に澄んだ野上先生の声が、受験生の暗いいらだった気分を忘れさせて、いつか夢中で聞き入ったのを思い出す。そして又、僕の心に浮かぶのは、第二高等学校の図書館だ。桜なみ木に面した窓で、北国の秋の夕陽をあびて、市河先生の註をたよりに、その頃はまだ眼新しかった赤い表紙の英文学叢書に読みふけた。僕がイの一番に頁を開いたので、内心得意であったことも、何となく書きつけておきたい気がする。

ギッシングは殆ど英語を知っている程の人であったならば、少なくともその名は知っている程、我国では知られている。けれども、その伝記に至っては、貧乏暮らしをしていたのが、晩年には読書三昧の日を送った人だろうーと言った程度の知識よりないと思う。それもその筈、英国の文献でも、ひどく言えば「だろろう話」の連発なのである。ギッシングの一生は、若しも芸術的才分のある人の筆に載ったならば、面白い一篇の読物になり得る数奇な生涯なのである。私はただ書簡、その他に依って、事

-- vi --

実を書きならべただけだ。わづらはしい脚注も、ただ事実の正確を望んだからのことなのである。全集のない彼の作品を集めるだけでも、是非執筆前にやりとげようとは思っていたが、遂に作品三つは手に入らなかった。少しでもこの清純な知識の使徒の生涯と作品が、我国によりよく知られれば僕の本望である。

僕はこの書を、浅間山麓の信州追分の昔の脇本陣油屋の、窓の下に山羊の鳴く静な部屋で書きあげた。何くれと、不慣れな仕事に苦しんでいた僕を励ましてくださった同宿の友に感謝する。そして、何よりも先に手を取って導いて下

さった恩師齊藤勇先生の、いつに変わらぬ御親切を深謝しなければならない。原稿から校正までも、何くれと心配して下さった酒井善孝、植田虎雄両兄の御好意をも、僕は決して忘れない。

ギッシング死して三十年。彼の苦悩をなやむものは尚益々多い。この一書が多少でも、世の為になるのならば、僕は喜んで、更によりよいギッシング伝の完成を企てるであろう。

一九三三年八月

織 田 正 信

目 次

はしがき	v
I . 序 説	1
II . 秀才—入獄—アメリカ流浪	6
III . 霧のロンドン—クラブ・ストリート	16
IV . イタリアの旅—エクセタ定住	60
V . エプソム転居—南欧の海辺—流浪の晩年	86
VI . ギッシングの窮乏	114
年 表	119
書 目	123
索 引	133

図 版

晩年(1901年)の写真	巻頭口絵
書簡(1885年九月、Morris 拘留事件を弟に報せるもの)	40
肖像(William Rothenstein の筆)	66

I. 序章

夏目漱石は、長塚節の「土」の序で、次のやうに言って居る。——「余の娘が年頃になって、音楽会がどうだの、帝国座がどうだの云ひ募る時分になったら、余は此の『土』を読みたいと思つて居る。娘は屹度厭だといふに違いない。けれども余は其時娘に向つて、面白いから読めといふのではない。苦しいから読めと言ふのだと告げたいと思つて居る。参考の為だから、世界を知る為だから、知つて己れの人格の上に暗い恐ろしい影を反射させる為だから、我慢して読めと忠告したいと思つて居る。」——この言葉をそのままに、僕はギッシングを読まうとする人々に向けたい。ギッシングの作品から、面白いものを探さうとなれば、これ程くだらぬ労力の浪費はあるまい。彼の作品はつまらない。そして、すぐれた芸術的傑作であると言ひ切れるのも、極く少ない。もつともつと巧みな、香りの高い作品は無数にある。彼に独自の文体と独自の価値があるにしても、それに出会ふのは、時たまの事であつて、砂を噛む思ひで数百頁を読み続けなければならぬこともあるのだ。しかも描かれた世界は、燈心がぶすぶすいぶつて居るランプの光りぐらゐの明るさよりない世界なのである。

「ロンドンには、車をひいて町々を廻つて、パラフィン

-- 2 --

油を売り歩く人々の居るのを知つて居るかい？」(“Do you know there are men in London who go the rounds of the streets with a cart selling paraffin oil?”)

¹——と、ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882—) は、ギッシングを論ずる²冒頭にこの彼の言葉を引用してゐる。この一文から霧深いロンドンの裏通りを、うすぎたない細道とうす暗い部屋とを、そして、その中で青白い顔をもたげながら南欧の天地を憧憬している一人の作家を思ひ浮べ得るのだ。身には襤褸をつけながら、手にはラテン・ギリシャの古典がある。彼の目前には、人類の文化がその寶庫を開いて待つて居るのに、机にしがみついて、生きる為に食ふ為に筆を動かさなければならない。しかも、その部屋は、うす汚なくうす暗い。彼は現実とは醜悪なものであり、醜悪とは現実であることを示さうとして、自己の体験をぶちまける。読むものは作家の溜息をまざまざと感じる。苦しい小説であり、読みづらい小説ではある。

ギッシングのどの作品にも、ともすると作家の影が表面に出て来る。かうした作家に接する道は、作家としての彼に接するよりは、個人的關係に立つて彼を見ることにある。確かにヴァージニア・ウルフが言ふやうに、ギッシ

¹ 妹 Margaret にロンドンから送つた手紙 (Jan.13, 1880) .

Cf. *The Letters of George Gissing to Members of his Family; collected and arranged by Algernon and Ellen Gissing, p. 55. (Constable. 1927.)* (以下

Letter と記す)

² *An Introduction to the Selection Autobiographical and Imaginative from the Works of Gorge Gissing by A. C. Gissing. (Jonathan Cape. 1999.)*

[このウルフの論は、*The Common Reader (2nd series)* の中に再録されてある。多少差異はある。]

-- 3 --

ングは「不完全な小説家」である。不完全ではあるが、より完全な作家の与え得ぬものを——少くも小説的な小説作家の与へぬ或るものを読者に与へるであらう。若しも読者に、作家の生涯が十分に知られて居たならば、作中の主人公に対して深い同情が湧き、頁をめくるのも惜しくなるであらう。読者は作中の人物と共に、そして作家と共に、考へる。彼ギッシングの世界観の狭さ、その感覚の鈍にして粗雑な点を責めることは容易であつても、「人間の精神力を信じ、作中人物に思索せしめる実に稀に見る小説家である」といふウルフの評言は否定し得ないであらう。人間情痴の世界から逸脱し、現実の世界を克服して、歴史の世界へと自由を求めるに至るのである。機会が発明され産業革命が起つて、人が機械に駆使される世界の外に、人が神と共に遊ぶギリシャの世界もあつたことを知るであらう。ダーウィン (**Darwin, Charles Robert, 1809-82**) 以前に、人は神のいと子であると考へて居たのだ。考えさせられる苦痛は、生活苦を克服して、一時的な陶醉は得られずとも、歴史に立脚する人生観を把握する報いがあるものだ。ギッシングの作品を読了して、我々の獲得するものは、個性でもなければ事件でもなく、物を考へる人間にふさはしい人生の一解釈なのである。ギッシングは、「不完全な小説家ではあるが、実にすぐれた教養のある人物」*である。

—————
* “an imperfect novelist, but a highly-educated man.”とはウルフの前述の論文の結語である。

-- 4 --

ギッシングが筆を執りはじめたのは、**1880** 年代。所謂世紀末の暗黒が迫り、産業革命の影響は既に根深く、文化の混乱し始めた時代である。リアリズムの流れは種種の形態を採つて文芸の上に現れ、事物をありのままに正視しようとした時代の趨勢が、ギッシングを動かしたのは勿論である。けれども彼は、ジョージ・ムア (**George Moor, 1852-1933**) のやうに借り物の文学理論で轉々と変化し得る人間ではなく、体験からにじみ出た方法に依つたのである。ギッシングを正當に論じようとするならば、彼が如何に生き如何にして時代から受け取ったかを先づ充分に論じた上で、我々に何物を与へるかを考察しなければな

らない。特にギッシングのやうに生活苦に追はれた作家の場合、時代環境を論じることには必要である。けれども、十九世紀末の英国と、現代日本の社会情勢とどれだけの差異があるであらうか。実に多くの類似点がある。その諸点を指摘せずとも、ギッシングが作品で述べる所と、現代のインテリゲンチア出の左翼作家の言ふ所と、読者が比較して見られたならば、容易にその類似点を発見されるであらう。ギッシングはインテリゲンチアである。インテリゲンチアの世界は次第に追ひつめられて、その生活苦は深刻になるのみだ。私はギッシングが如何に生き、何物を私に与へたかを書いてみようとする。彼ギッシングの生涯が失敗であったか成功であったか。——インテリゲンチアの正しい生き方がどんなものであるのか、私には言ひ切れない。ただ私の知る限りのギッシン

-- 5 --

グを伝えようとするのみだ。

二十世紀の原始人ロレンス (**Lawrence, David Herbert, 1885-1930**) のやうに、「ギッシングやチャタトン等のやうな飢ゑ死んだ人間には、同情がもてない」¹——と言ひ切れる原始人に向つて、ギッシングを説くのではない。とは言へ、ロレンスとても、尊敬を払って居たことを告げよう。——「ギッシングには、自分をとらへるだけの精力と熱情がない。けれども、自分は非常に彼を尊敬して居る」²と云つてゐる。

何はともあれ、僅かに「ヘンリ・ライクロフトの手記」(*The Private Papers of Henry Ryecroft*) と短篇が知られてゐるのみの我国の読書界に、少しでも彼の作品が多く読まれるやうになつたならば、私の努力は無駄ではないのだ。名訳³と立派な註釈⁴のある「ヘンリ・ライクロフトの手記」も、初期の作品を読んでから読まれたならば、更に興味をますものと信じる。

¹ *The Letters of D. H. Lawrence*, edited by Aldous Huxley, p. 91. (Heinemann, 1932.) — "I've no sympathy with starvers, Gissing or Chattertons." [Chatterton, Thomas, 1752-70.]

² *The Letters of D. H. Lawrence*, pp. 21-2.

³ 藤野滋訳：「ヘンリ・ライクロフトの手記」(春秋社。大正十三年。)

⁴ 市河三喜解説註訳：*The Private Papers of Henry Ryecroft*. (「英文学叢書」。研究社。大正十年。)

-- 6 --

II. 秀才——入獄——アメリカ流浪

ジョージ・ロバート・ギッシング (**George Robert Gissing**) は、1857年(安

政四年)十一月二十二日、ウェイクフィールド (**Wakefield**) に生まれた。父はトマス・ウォラー・ギッシング (**Thomas Waller Gissing**) と言ふ薬剤師であった。熱心な植物学者*であり、教養のある相当の人物であったらしい。長男に生まれたジョージは、物の読み方からして父そっくりであったと言はれ、種々な点でこの父の影響を受けて居るらしい。ともあれ、今日その弟妹達の手によって出てある書簡集 (*Letters of Gissing to members of his Family, collected and arranged by Algernon and Ellen Gissing.*) を開いたならば、其処には海辺で嬉々として釣に興じ貝類の蒐集に余念のない少年 (**1868** 年) ギッシングの姿を見出すであらう。彼がはじめて手にした文学書が、ディッケンズ (**Dickens, Charles, 1812-70**) の「古道具屋」(*The Old Curiosity Shop, 1841*) であり、十歳の時であると言はれて居る。ディッケンズと共に彼の幼時の心を占めたのが、画家 Hogarth — 社会風刺画家 Hogarth (**Hogarth, William, 1697-1764**) であった事は、興味ある事実であ

* Cf. *Letters*, p. 347 (May 20, 1896.):—”In looking over the *Journal of Botany* yesterday, for 1889, I was much pleased to find father’s name in a ‘Biographical Index of British Botanists.’”

-- 7 --

る。社会悪をあばきたてる Hogarth の絵を、無心に模写して居た少年が、やがては社会から追はれて、海の彼方にまで流れていくのだ。美術学校に通学したり、自然美に細かい感覚を動かして居る少年に、父は何くれとなく援助を与へて居る。**1870** 年九月の日記¹を繙き、更にその年の十二月、十三歳の彼が父を奪はれたのを見るならば、やがて述べる彼の過失を咎めだてる人は無いであらう。そしてチェシア (**Cheshire**) のオールダリ・エッジ (**Alderley Edge**) の Lindow Grove Boarding-School に、父を失ったギッシング三兄弟が、肩をすぼめて入校したのは、その翌年のことである。

友をさけて、スポーツにも加はらず、専念学業にいそしんで居た彼が家におくった手紙には、妹に何くれと読書の指示をして居る、心情の見る可きものがある。長男の彼には、何としてでも人におくれを取るまいとする負けじ魂があったのだ。弟妹ひきつれて世に出ようとしたのであらう。オックスフォード・ケムブリッジ両大学の地方執行試験²に見事な成績を得、マンチェスタの Owens College (**Owens College**) の奨学資金³を得た。時に彼はまだ十五歳にたらず、規定の満十五歳に達しないにも拘らず、この資格を得たのであるから、もって彼の

¹ Cf. *Letters*, pp. 4-7.

² **The Oxford and Cambridge Local Examination.** 大学監督の下に行ひ及第者に證書を授与するものである。

³ 奨学資金と共に三学期間の授業を受ける資格あり。

-- 8 --

秀才振りが解るであらう。マンチェスタに赴いて以来の彼の勉学振りは、歩いて居る間も本から眼を離さなかつたので、**pot-hunter**¹の異名をとった程であった。**pot-hunter**の名にそむかず、最初の学期には、ウォード教授英詩賞 (**Professor Ward's English Poem Prize**) を獲得し、ことに古典では常に抜群の成績であった。更に十七歳にしてロンドン大学に入学し、ラテン及び英文学に稀に見る成績をあげ、シェイクスピア賞 (**Shakespeare Scholarship**) を得て居る。人も許し自らも信じて居た洋々たる前途は、病魔ならぬものに断ち切られたのである。

親友であり彼の伝記作家でもあり多くの彼の著作の序文を後になって書いたモーリ・ロバーツ² (**Morley Roberts, 1857-**) に、彼が語った所によれば、一一十六歳の自分が大都会の中に投げ出されてただ一人で暮さなければならなかつたのは、実につらいことだつたのだ、「今にして思へば、妹の内の一人でも一緒に来てくれる可きだつた」 (**"I see now that one of my sisters should certainly have been sent with me."**)³ と言って居る。妹エレン (**Ellen**) が十六歳の頃の彼を、こんな風に描いて居る。――「長身、こい褐色の髪、色白の高い額、そして離れた物を見るときに瞼をよせる軽い近眼。さはればほんとに軟い手、・・・そ

¹ 賞のほしさに競争に参加するもの。

² **Morley Roberts** に *The Private Life of Henry Maitland* (**Nash and Grayson, 1923. New and revised edition.**) と言ふ作があつて、ギッシングを描いたものである。

³ **Ibid., p. 33.**

-- 9 --

して、想ひ起すのは、人にものをしてくれとたのむとき、そんなことをたのんで気をそこねはすまいかと心づかひをする特に眼につくやさしい態度である。他人がどんな風を感じ考へるかを過度に考へるのは、一生を通じて、一つの非常な特性であつたし、生活苦と共に強められて行つた性格である。」¹ 多感な敏感な少年は、得て寂寥に骨まで噛みしめられる。幾つかの賞は得ても、生活をなぐさめてくれる友は得られなかつた。彼の得た慰みは、女心であつた。それも巷に春をひさぐ女であつた。あらゆるものを投げ出して、年齢も同じ位のこ

の少女を救ひ出さうとした。ミシンを買って乙女に生業を与へようとした、十八歳の少年の心境を思ふ可きだ。だが彼のこの夢のやうな理想が、実現し得るのは人生に於てではない。遂に学校の友達的所有物を盗み初めた。併し秀才たる彼に疑をかけ得る程に、洞察力のある教師はいつの世にも居ない。探偵が現場を見つけて彼を捕へた時、学校は驚き入ってしまった。入獄！——多感な彼が入獄したのだ！

ウェルズ (**Wells, Herbert George, 1866-**) の言葉を借りれば、「この時以後、彼は破綻異常な生涯を送った」² ののである。そしてモーリ・ロバーツの言ふやうに、「彼の全生涯は、彼を破滅せしめ得るやうな性格の発展に過ぎな

¹ *Letters*, p. 403. Appendix. C.

² “From that time his is a broken and abnormal career.” (H. G. Wells: “George Gissing,” in the *Monthly Review*, August, 1904.) Wells のこの論文は一読の価値がある。

-- 10 --

いのである。」¹ 餘に良い性質を持って居た彼は、彼を獄屋まで投げ込んだその女性と結婚している。社会の規律を一度破った彼には、もはや生活の途は杜絶してしまつた。友の家族のなさけにすがつて、故国を棄ててアメリカに流れ渡つた。時に **1876** 年。未だ十九歳にならない時である。

ギッシングのアメリカ生活に就ては、多くの伝説的物語に満ちて居る。その一面の理由は、不面目な渡米の原因からではあらうが、又他面には彼の内気な性格からも来て居るのであらうと、「自分の生活を語るとなると、いつもきまつて、話のはづまなくなるし、言葉に力がなくなる」² と言ふ親友モーリ・ロバーツの言葉からも考へられる。近親にさえも、心配をかけまいとの心からか、彼はともすると事実よりも、よりよく語る風があるのだから、事実を確かめることは不可能である。殆ど凡ての伝記者が書いて居る事実と、書簡集から想像し得られる所とを併記しよう。

殆ど凡ての伝記者が述べる事實は、彼の傑作「当世三文文士街」(*New Grub Street*) の中の一章³で、作中のウェルプデイル (*Whelpdale*) と言ふ一三文文士の経験談に基

¹ “His whole life is but a development of the nature which make his disaster possible.” (*The Private Life of Henry Maitland*, p. 30)

² *The Private Life of Henry Maitland*, p. 32.

³ Chap. 28, “Interim.” 更に Morley Roberts は *The Private Life of Henry Maitland* の中で大同小異の事実を述べてゐる。

-- 11 --

づいてゐる。ニュー・ヨークからボストンと、持って居た金と個人教授で生活を支えてゐる間に、やがて貧に迫られる。ウェルプデイルの言葉を信じるならば、歸心は動いたが、冒険心に動かされて、西部に行ったならば富が得られようと、移民乗車券を貰って、十二月に、堅い席に腰をおろしてゆられゆられてシカゴに到着した。**1877**年の正月、ポケットには五ポンドでシカゴ市の人となったのだ。四ポンド半を投げ出して一週間の宿を得たとは言へ、前途には何の望みもなかった。ふと思ひついたままに、「シカゴ民友新報」(*Chicago Tribune*)社に、文字通りに飛びこんだ。シガーをくゆらして居た若い男に、ギッシング一代の勇をふるつて、使ってくれと申しこんだ。どんな経歴があるのだと言ふ、この親切な編輯者の言葉に、「何もありません」(**"None whatever."**)と答へた正直さ。さすがはアメリカで、まあ小説でも書いてみるさ——と言ってくれたので、早速なけなしの有金を払ってペンとインクと紙を買った。宿に帰って見ても、その宿にとまって居るものは旅役者が大半であり、部屋には火がない。談話室に行って、十餘人の人々がわめき立ててゐる中で、凡そ一日の間に、新聞三段になるだけの小説を書きあげた。その小説が、土曜付録 (**March 10, 1877.**)に掲載されて、十八ドルを得た。ミシガン湖畔の寒風に吹きさらされながら、懐中殆ど無一文で着想し、執筆したのが騒がしい談話室の片隅である。この一文が、ギッシングの書いた最初の小説であることを考へてみね

-- 12 --

ばならない。「そんな奴に物が書けるか？一度も飢ゑたことがないんだ、あの男は」(**"How can one write? He never starved."**)と屢々ギッシングは言ったと言ふ。仮定を持って来て事実を解釈するのは危険ではあるにしても、ウォルター・ペイタ (**Walter Pater, 1839-94**)の静かな思索生活が為し得られなかったと誰に言ひ得よう。飢ゑをしのぐ為に書いたのがギッシングの小説である。数個月間、文筆生活を辛うじてつづけ得た。²けれども彼の弱い神経が長くつづかう筈もなく、ホーム・シックにかかつてしまった。その時偶然にトロイ (**Troy**)と言ふ町の新聞紙が、彼がシカゴの新聞に書いた作品を無断で掲載してゐることを知り、其処に行ったならば、更に場所を違えて生活も出来ようと、出かけてみたが、そんなものは束になる程、ロハで手に入ると言った挨拶。ピーナツを嚙ちりながら過した五・六週間の生活を、或は写真屋の助手に

¹ Cf. Morley Roberts: *The Private Life of Henry Maitland*, p. 37.

² Morley Roberts が *The Private Life of Henry Maitland* (p. 38)の中で、"I think it would be very interesting if some American student of Maitland [*i.e.*

Gissing] would turn over the files... and disinter the work he did here.”と書いたことなどが動機になって、アメリカでは非常な努力の上、下記二冊の本が出てゐる。Morley Roberts が出版をすすめなかつたやうに、全くどの目から見ても価値のないものであらう。作品は総計十一あるが、書名のあるものはその内四つで、他は推定である。

Sing of the Fathers, reprinted by Pascal Covici. Chicago. 1924. 550 copies.
Brownie. Columbia University Press. 1931. 500 copies.

-- 13 --

なつたとも言ひ、鉛管敷設人 (plumber) になつたとも言はれ、ガス器具取付の商人と一緒に歩いたとも言はれて居る。何はともあれ、やがてボストンに再び姿を現したことは事実らしい。

書簡集を開いて見ると、1876年にボストンから弟にあてたもの二通と、1877年一月にウォルサム (Waltham) から書いてゐるものとの三通だけである。ボストンからの手紙でみると、同宿の知人の紹介で「大西洋月報」(*Atlantic Monthly*) に寄稿するために、ハイネ¹とバーンズ²の比較論を書いたり、ボストン図書館の完備してゐるのをほめ、独逸語の研究に没頭しハイネを訳して英国で出版するのだと言つてゐる。ボストンに近いウォルサムの地で、彼はハイ・スクールの先生として「実に愉快に生活してゐる」³と言つてゐる。家人を慰めようとして書いた手紙であるとして、この事実を否定し去り、十二月に汽車にゆられてシカゴに向つた事実を認めるか、——何れにせよシカゴの文筆生活は事実である。後年、処女作「暁の労働者」(*Workers in the Dawn*) の出版者が得られなくて、いらいらした日を送つてゐた頃に、シカゴの文筆生活をいささか得意気に書いてゐる。⁴何れの点から考へてみても、彼の滞米は1877年の六月迄であり、それ以前のこと

¹ 独逸の詩人ハインリッヒ・ハイネ (Heinrich Heine, 1797-1856) .

² Burns, Robert, 1759-96.

³ Cf. *Letters*, p. 21 (Jan. 22, 1877):—"putting my salary and my private teaching together I can live very comfortable indeed."

⁴ Cf. *Letters*, pp. 57-8 (Feb. 7, 1880).

-- 14 --

はあるまいと思ふ。¹そして十月には、確実に帰つて来て戻る。²スウィナトン (Swinnerton, Frank, 1884—) は、直接帰英せず更に独逸イエナ (Jena) に於て哲学的教養をつんだと言つてゐる。³そして、「ヘンリ・ライクロフトの手記」の「秋」(VII) に出て来る E. B. を、Eduard Berts であるとなし、独逸

で得た友人であると言っている人もある。⁴彼の処女作「暁の労働者」に見る哲学的教養は、おそらくは彼のアメリカ滞在中に発した独逸に対する関心の産物であって、独逸に行ったにせよ、決して長い時日ではあるまい。スウィナトンの言ふやうに、思想的に影響する程長期間の滞在のものとは考へられない。

二年有余のアメリカ流浪が、彼になにをもたらしただであらう。霧のロンドンに帰った時、彼の心境はどんなであつたらうか。寂寥から出た罪であり、同情から出た罪であってみれば、多情多感な、だが一面には知的優越を自

¹ *Brownie* と言ふ *sign* のある作品は、*Tribune* 誌の **July 29** にのつたのであつて、書き残しておいたものと見ても、六月以前に出発してゐるとは思へない。

² **10月15日**に弟 **William** が兄にあてた手紙では、既にその帰国を知つてゐる。**Cf. Letters, p. 22.**

³ **Swinerton: George Gissing, A Critical Study, pp. 26-8. (Martin Secker. 1924.)**

⁴ **Ibid.** 尚、**Berts** と言ふ名は、書簡集にも諸所に見えてゐる。次の一文からも解るやうに、独逸の事情を彼に知らせた人であるには相違ない。**Cf. Letters, p. 52 (Dec. 21, 1879).** —**"In consequence of my acquaintance with Berts I hear very much of German life and occasionally see German socialists who are living in London."**

-- 15 --

負する彼のやうな青年は、深く因習に反感を抱いたに相違ない。三通のアメリカからの手紙は、アメリカのデモクラシーに同感を抱いてゐた事を物語つてゐる。ロンドンに帰りついた彼が、復讐と反抗の念に燃えてゐた、と見ても誤りではあるまい。しかもロンドンは、この燃えあがる心を圧迫して、ただ屋根裏に燻らしたに過ぎないのだ。

-- 16 --

III. 霧のロンドン——クラブ・ストリート

流れついたとも言ひ得るギッシングが、ロンドンでの苦闘の生活を支へる唯一の柱は、知識であつた。だが単なる教養が、生活の資をもたらし得ようか。彼の足は徒らに空に浮いて、現実を忘れる。彼より二つ若い弟ウィリアムが、事毎に痛烈な忠告を与へて居る。この弟は兄ギッシングの処女作の出版を見て間もなく、**1880年**に夭折してゐるが、マンチェスタ市で事務員¹をしながらも、

音楽をはじめ芸術的教養をつんだすぐれた人物であつたらしい。兄の足を地につけさせた点は、この弟の力とも言ひ得よう。——「私の願ふ所は、ただただ兄上が片時も早く、人生に於て正しき位置を獲られんことです。兄上の思想は現在の環境に生きるを得ぬもの、遙かに環境を超越す可きものです。とは言へ、兄上に課せられた人類の一員としての義務は、兄上を動かすでせう。人は自らの為に生きるものではなく、人類の為に生きるものです。・・・兄上の知識は、出来得る限り広範囲に涉って、与へられ扱められなければなりません。」²——かうした風に、ともすれば、知識の蓄積にのみ余念のない兄に忠

¹ Cf. *Letters*, p. 17.

² Cf. *Letters*, p. 25 (Jan. 20, 1878).

-- 17 --

告するのである。

その兄は、渡米以来の翻訳や新に稿をおこした創作にかかつては居ても、大英図書館 (**The British Museum Reading Room**) の閲覧券¹が手に入った上は、足繁く通った事であらう。けれども、英国の生命線をおびやかす東方問題が起こって、ロンドンの市中には陰悪な空気が漂つてゐた。疲れた彼が、滅入りこんで病んだのも、もつともな事であらう。²やがては伸長するに相違ないスラヴ民族の発展を一・二代の間停止したとて何になると、グラッドストーン (**Gladstone, William Ewart, 1809-98**) の自由政策に賛意を表して居る。「若しこの儘にしておいたならば、やがてパリ・コムミュンに似た不愉快な情態になるであらう」³と言ふギッシングの言葉をそのままに、**1879**年の暮から翌年にかけて、ロンドンには稀に見る濃霧におそはれたのであった。この暗い空気はあらゆる社会情勢に影響して行く。⁴ハイド・パークに群れ集る失業者は無数である。ギッシングの部屋には終日ランプがともされて居た。⁵妹にあてた手紙に——「ロンドンには、車をひいて町々を廻って、パラフィン油を売り歩く人々の居

¹ Swinnerton: *George Gissing*, p. 28-9.

² *Letters*, p. 27 (Feb. 12, 1878): —"The novel does not get on as well as I could wish— in fact I feel unequal to almost any effort just at present. The sickening political news has a great deal to do with it."

³ *Letters*, p. 37 (Dec. 5, 1878).

⁴ Cf. R. H. Gretton: *A Modern History of the English People*. (Martin Secker. 1930)

⁵ *Letters*, p. 55 (Jan. 13, 1880).

るのを知ってゐるかい？」と書いたのを、もう一度引用しよう。**1880**年と言へば、「ボイコット」¹と言ふ言葉が生まれ出た年ではないか。

追ひつめられて行くギッシングの姿をみよう。「僕は全く希望を棄ててしまった。前途には飢餓と窮乏があるのみだ」²と言ふ言葉を聞くのは、当然の結果であらう。僅かな個人教授から得た収入で、細々と生活を保たねばならない。けれども、——「君、パンの為には、何とした所で働かねばならないのだ。創作の筆を一日でも棄てられたらと、度々思ふのだ。——だが、パンの為なのだ、我と我身に言ひ聞かせては、思ひ切つて机にしがみつくだ」³と言つてゐる彼を、霧に閉ざされた部屋のランプの下で、青白い顔をして、ただ溜息を吐いてばかりゐたのだと想像してはならない。コント⁴を熟読して、スペンサー⁵を現存最大の哲学者と賛美し、広くジャーナリズムの世界までも窺う彼であつたのだ。「我々は我々の思想と実践とを、現実の強固な基礎の上に建てねばならぬと、益々痛感しつつある。歴史を——思想と実践の根源をなす実践の歴史及び思想史を知らねばならぬ」⁶と言ふ要

¹ **Ireland Land League** からボイコットされた **Captain Boycott (1832-97)** の名から出たのである。

² *Letters*, p. 32 (July 24, 1878).

³ *Letters*, p. 47 (Aug. 13, 1879).

⁴ **Comte, Auguste (1798-1857)**. 仏国実証哲学の創設者。

⁵ **Spencer, Herbert (1820-1903)**. 総合哲学を説き、生物的社会的進化説を唱ふ。

⁶ *Letters*, p. 41 (Jan. 26, 1879).

求を、彼は更に拡大し発展せしめて、「宇宙の諸法則」(**the laws of the universe**)¹を追求するのだと言ひ切つてゐる。この追求を、一文なしのギッシングがしてゐるのだ。けれども彼は言ふ——「食卓に人生最上の美食が得られないからと言って、絶対に物を喰ふまいと覚悟するやうなものだ」²と、飽くまで理想を追求しぬく決心を示してゐる。彼にとって創作は、生活の手段であつた。とは言へ、決して創作に自信が無かつたのではなく、「若し文学が男子の職業であるならば、文学は確に自分の職業である。既に久しく書きつづけてゐて、書く事は第二の天性になつてゐる」(**"If ever literature was a man's vocation it is certainly mine... I have written now for so long that it has become second nature."**)³——と考へてゐた。若し彼に生活の余裕があつたならば、彼の創作

は決して現実に向はず、ただ一つ晩年の未完成な作品⁴に見得る史的な素材に向ったであらうとは、容易に想像し得ることである。⁵けれども、飽くまでも、彼に取って第一義的な問題は、自己の教養であった。着実な兄思ひの弟

^{1, 2} **Letters, p. 69 (March, 1880):—**“But all this pre-supposes boundless learning... But shall I on this account renounce study altogether? Just as well make up my mind not to eat at all because I cannot procure the dearest luxuries for my table.”

³ **Letters, p. 57 (Feb. 7, 1880)**

⁴ **Veranilda (published 1904)**

⁵ **Letters, p. 35 (Nov. 15, 1878):—**“You know what abundance of material for poetry and drama is contained in the medieval history of the Italian Republics... I think of trying a play on it, when I finish my novel.”

-- 20 --

から、兄上はまるで生命を投げ出して、夥しい知識を貯へて居られる。けれど、生活の手段はどうなさるのだ¹とつめよられ、自分の貯金までさいてくれて居るこの弟の死の直前には、何か他の職業に移る御考へはないのか²とまで言はれてゐる。仕方がなければ、事務員にでもなって、せめて余暇³をさいて勉強しようと、血を吐くやうに言つてゐる。

此処まで、ギッシングを追ひつめた社会に対して、彼が取った反抗手段⁴は二つある。一つは公開講演 (**public reading**)⁵であった。コントの実証主義を余りに楽天的であるとなし、「若し何よりも先に、大衆教育を標語としなかつたならば、何等重要な進歩も効果も産み出さないであらう」 (“**No material advance will ever be effected if we do not take for our earliest watchword—popular education**”)⁶と言ひ、十全の教育方針の確立と公開図書館の完備とを力説して居る。ギッシングの所謂「知識の解放」 (**Intellectual Emancipation**)⁷の道を遮るものは、国教会であるとなし、その破壊を第一に目指してゐる。その演

¹ **Letters, p. 44 (March 14, 1879).**

² **Letters, p. 55-6 (Jan. 24, 1880).**

³ **Letters, p.70 (March 1880)**

⁴ 彼の意義が改革にあつたにせよ、自我を棄てきれぬ彼には、常に自己偏重の弊があつたことは、否定し得ない。言ひ得るならば、自己満足を求める改革である。

⁵ **Letters, p. 41 (Jan. 19, 1879):—** “It [i.e. public reading] would be a

step in the direction of lecturing, which is a great aim of mine.”

^{6, 7} *Letters*, p. 42 (Jan. 26, 1879).

-- 21 --

題として知り得るのは、「信仰と理性」(Faith and Reason) 及び「純理主義者のみたる国教会」(The State Church from a Rationalist's point of view) の二つ¹である。「知識」に対する彼の見解が人間性に根ざさないものであり、まして「知識」獲得に要する物的条件などを考慮せず、単なる因習への反抗に走ってゐることは、彼の初期の作品にも見られる所である。彼の理想の共和国²は、知的貴族主義であつて、深い人間性に根ざしたものではない。その社会観は決して確固たるものではなく、彼が既に早くから愛読してゐたディッケンズのやうに、他人の心境に深く入り得る愛情の如きは、自己優越を過信する彼の為し得る所ではない。——と言つても、多くの友人が口をそろへて言ふギッシングの暖さを否定し去らうと言ふのではない。「知識」を人間批判の標準とし勝ちな所謂「インテリゲンチア」の通弊を彼が多分に持つてゐたと言ふのである。そして創作は彼の第二の反抗手段であつたとも言ひ得る。それ故、ディッケンズのやうに大衆の支持を得ることが出来なかつたのも、当然の結果であらう。「経済的の結果は、たいして期待を持つてくれるな。この作がディッケンズのやうに世間に受けるものぢやない事は、自分でよく知つてゐるのだから。世間に受けるには、この作はあまりにつきつめた真剣味があり過ぎる。だから、受けるとすれば、知識階級に受けるに相違ない」と、

¹ *Letters*, pp. 44-5 (March 28, 1879).

² *Letters*, P. 67 (March 27, 1880).

-- 22 --

処女作出版の日に¹弟に言つてゐる。知識階級は決して多数ではあり得ないし、しかもギッシングは創作を唯一の生活手段としてゐるのである。

ギッシングの処女作「暁の労働者」は 1880 年二月に世の光を浴びた。前年十一月に完成して以来、多くの出版所の手から手へと流れ歩いて、遂に出版者が見つかつて世に出たのではない。匿名の自費出版²なのだ。おそらく彼が持つてゐた金、——即ち五百ポンド³、——1878 年に丁年に達したので入つた父からの遺産から出したのであらう。

この作ははじめ「遙か、遙か、彼方に」(*Far, Far, Away*)⁴と題してゐたことから解るやうに社会改革運動を取り扱つたものである。作者の言葉を借りれば、「社会問題を取り扱つた小説であり、その主要人物は、謂はば文明の新展

開の暁に際して、改革に苦闘する真剣な若き人々なのである。」⁵ 前途有為な青年画家アーサー・ゴルディング (**Arthur Golding**) は、その師匠から「我々の見たままに民衆を忠実に描写せよ」と言ふ画家ホガスの言葉を与

^{1, 2} *Letters*, pp. 58-9. Remington & Co.の出版。弟妹には自費出版ではないやうに言っている。その心情を見よ。

³ *Letters*, p. 32 (July 1878)

⁴ *Letters*, p. 50 (Nov. 3, 1879):一少年の一隊に”There is a happy land, far, far, away!”と言ふ賛美歌を歌はせる。

⁵ *Letters*, p. 53 (Jan. 2, 1880):—”The principal characters are earnest young people striving for improvement in, as it were, the dawn of a new phase of our civilization.”

-- 23 --

へられ、社会を忠実に描写して民衆に社会の欠陥を認識せしめ、自信が苦しんだ社会環境を改良しようと志す。又ヘレン・ノーマン (**Helen Norman**) と言ふ牧師の娘は、貧民救済に努めてゐる。二人は恋におちる。だが、青年にはのんだくれの女房がある。凡ては、ノーマンの若か死と、アーサーのナイアガラ瀑布投身に終る。「この書は第一に、普通言はれてゐる意味の小説ではない。が併し、私から見れば甚だ批難す可き現在の宗教及び社会生活の或る面を、強く(たしかに余りに率直に)攻撃したものなのである。・・・故に、私は急進理論派の代弁者なのだ」¹とは作者の言葉である。作者の見解に従へば、この世には貧富の二階級があつて、まづしいものは「野獣の階級」(**a class of brute beast**)²であり、富者は徒らに無益の浪費に耽る。この一篇は、安逸の生活と貧困の生活の対照を粗雑に描写したものであつて、僅かの傑作を除く外、ギッシングの作にみる通弊を備へてゐる。ヴィクトリア中期のやたらと大きい伝統的小説形式³の下で、みじめに喘いでゐるのだ。ディッケンズやサッカレ (**Thackeray, William Makepeace, 1811-63**) は、巨大であると共に簡に

¹ *Letters*, p. 73 (June 8, 1880):—”I am a mouthpiece of the advanced Radical party.”

² Cf. Swinnerton: *George Gissing*, pp. 54-5. ギッシングがこの作に現した階級観が述べてある。

³ Thomas Seccombe: “The Work of George Gissing: An Introduction Survey” (*The House of Cobwebs*, p. xi. London: Constable. Reprinted 1919). (Cf. *Letters*, p. 166. 一小説形式の推移に関する彼自身の見解。)

して要を得ることを知ってゐた。富者に憤激し、貧者の獣性に恐怖¹を抱く作者は、知識ある者のみに、優越を認める。そして、教養ある男性と、精神的劣等であるか又は教養に欠陥のある女性との呪はれた結婚は、既にこの作に現はれ、幾度か繰り返される。それは、作者自身の体験であるからである。この一書で、「謂はば私は、自分の生存の一時期を全部、書きつくしてしまった」(“**in that book, I have, so to speak, written off a whole period of my existence.**”)²と言ひ、この書の暗い調子を責める人に向かつては、「君が僕の日常生活をよく知ってゐたならば、明るく書く書かぬは兎に角として、ともかくも僕が物を書き得たのを不思議に思ふだらうよ」(“**If you knew much of my daily life you would wonder that I write at all, to say nothing of writing cheerfully.**”)³と言つてゐる。

彼ギッシングの生活に蛾のやうに付き纏う影——彼の妻。妻にひきづられた生活をうかがつてから、文人としての彼の生活を追及してみよう。一作を世に問ふて、ギッシングはグラブ・ストリート⁴の人となつたのだから。

ギッシングは彼の妻を人に会はせなかつた。学窓以来の友であり、ある時期には彼の唯一の友であつたモーリ・ロバーツでさへも会つて居ない。隣の部屋にゐて

¹ Swinnerton: *George Gissing*, pp. 50-2.

^{2, 3} *Letters*, p. 72 (May 30, 1880)

⁴ **Grub Street.** ロンドン市の一街の古名。現今の **Milton's Street** に当る。三文文士連が多く居住した所。貧乏文士社会の別名となる。

も、出て来ようともせず、ギッシングは妙にぎこちなくなるばかりである。その筈、彼女は酒がなくては生きて行けぬ女であつたのだ。酒に酔つて、酔ひつづれただけではないらしい。血のにじみ出さうなギッシングの金が、不足してくると——事もあらうに、昔の商売にもどつて、家をあける日が続いたと言ふ。

¹その頃を知るモーリ・ロバーツは、ギッシングが彼女に尽してやつた程、捨身になつて世話の出来る人間が、この世にあらうか、と言つて居る。どんな家だとして、彼等をおく所はない。恥に戦き、貧に怖えながら、転々と居を移さねばならなかつた。彼女を診察した医者の前で、彼女の前身をひたかくしにかくさねばならなかつた。彼の生活が索莫たるものであつたことは、想像はし得ても、その生活を生き抜き得る所謂インテリゲンチアが何人あらう。六・七ペンスもあれば、全部の家具が揃ひさうな部屋の中で、光つてるのは、彼が学窓で

得た賞のみであり、片隅には食事までさいて得たであらうと思はれる愛読の書がある。かうした間にも日曜日には、モーリ・ロバーツを相手に古典文学を語り合っただけを忘れる。²「おい、君、君は知ってるかい、ドクミ調とアンティスパスト調とのこまかい相

¹ **Gissing** の結婚生活に関するこれ等の事実は、**Morley Roberts: *The Private Life of Henry Maitland* の Chap. II.**による。

² このままの事実が彼の創作に現れてゐる。**The Unclassed** の中では、**Waymark** と **Julian Casti** は、日曜日毎に訪問しあつて文芸を談ずるのであり、**Casti** の妻はのんだくれの **Harriet** である。又、**New Grub Street (Chap. X, "The Friends of the Family")** の中の一章は屢々引用される。

-- 26 --

違¹を知りもしなけりや——生まれてこの方聞いたこともない実にみじめな奴があるつてことをさ。」(“**Why my dear fellow, do you know there are actually miserable men who do not know—who have never even heard of—the minuter differences between Dochmiacs and Antispasts!**”) ²と言ふ時、彼は貧苦を忘れてゐるのだ。貧の中にも教養をつみつづけるその力で、思ひ切つて、この呪れた「影」を断ち切つてしまへば好いのだ。だが、ギッシングは余りに弱い人間であつた。弱く清い人間が、義務の念にひきずられて行く時、下へ下へと落ちて行く。ただギッシングの心のみが、上へ上へと古典静穩の世界へと登つて行く。妻が彼を棄て去つて帰らぬ日が来た。彼は妻の宿を探し出して、宿の主に一週十シルリングの部屋代を払ひつづけた。しかも彼自身には一ペンスすら残らぬ日があつたと言ふ。けれども **1888** 年、ギッシングを引きずり廻したこの女性は、ギッシングの写真とマドンナの像を胸に抱いて死んだ。

妻の死の前後から、³彼はやや生活の安定を得たらしい。かうした悲惨な夫婦生活を切りぬけて行つた彼の労苦を辿つてみよう。グラブ・ストリートを放浪しぬいて、漸く多年の憧憬の地伊太利に旅立つ頃までが (**1888** 年)、文字通りグラブ・ストリートの苦難なのである。

¹ **Dochmiacs** と **Antispasts** と如何ちがふのか、僕も **Gissing** に叱られる仲間、知らない一人である。辞書をひくと、前者は短長長短格であり、後者は短長長短長格であるとしてある。

² **Morley Roberts: *The Private Life of Henry Maitland*, p. 75.**

³ **Cf. Ibid, p. 43.**

-- 27 --

彼の処女作を迎えた文壇は、「アセニアム誌」(*The Atheneum*)¹が相当の頁数をさいてくれたとは言へ、一個の芸術作品とは見ず宣伝用パンフレットとみてゐるし、匿名の作家を労働者とみて居る雑誌もあった。そして出版者は売行の悪さをこぼして居る。けれども、この作品は思ひがけぬ方面から賞賛された。既に早くからコント哲学の信奉者であったギッシングは、当時の英国実証主義者の代表者とも言ふ可きフレデリック・ハリスン (**Frederic Harrison, 1831-1923**)²に本書を送り、彼から非常な賞賛の手紙³を貰つた。ハリスンは、彼を食事に招待し、席上「ベル・メル誌」(*Pall Mall Gazette*)と「隔週評論」(*Fortnightly Review*)の主筆ジョン・モーリ (**John Morley, 1838-1923**)⁴に紹介し、モーリも亦ギッシングに向つて自分の雑誌に執筆をすすめた。けれども彼は決して、ジャーナリズムの波に乗らなかつた。⁵乗れば、彼の生活は好

¹ 1828年創刊。当時に於ける有力な雑誌。

² 1880年から1905年まで、**The English Positivist Committee**のPresidentであつた。

³ *Letters*, pp. 77-9 (July 22, 1880). 全文が掲載してある。

⁴ Cf. *Letters*, p. 80 (Aug. 20, 1880). モーリは又、**Matthew Arnold (1822-88)**にこの書の一読をすすめてゐる。

⁵ 彼が未完のままに残した *Veranilda* (London: Constable, 1904)に**Frederic Harrison**が序を書き、その中で次のやうに言つてゐる。—"I did what I could to help him with work and introductions. Mr. John Morley, then the editor of the *Pall Mall Gazette*, was willing to employ his pen. Gissing, however, though sorely pressed at the time, resolutely declined to engage in any miscellaneous work of journalism or criticism." *Pall Mall*誌は1880年代からradicalな傾向を多分に取つて来た。

-- 28 --

転したではあらう。けれども、性来さうした仕事に向かぬ自分を知つてゐたし、暗い家庭生活の中では何としても出来なかつたらしい。「今の心境では文学的労作を思ふことは不可能だ」¹と言ひながらも、やがて立直る彼だ。「確に自分は小説道で独自の道を踏み出したのだ。勿論、自分の手法と意図とは、ディッケンズのそれとは比較し得ないものだから。」("Certainly I have struck out a path for myself in fiction, for one cannot, of course, compare my methods and aims with those of Dickens.")²見る可きは、ディッケンズが彼の目標であり、ディッケンズを克服することが彼の理想であつた事だ。更に興味ある事実は、国内の雑誌に筆を執らなかつた彼が、——(むしろ筆をとることを潔よ

しとしなかったのであらう。)——ツルゲーネフ (**Turgenieff, Ivan Sergeievich, 1818-83**) の筆をとる「欧州の使者」(*Le Messager de l'Europe*) に、年四回英国の社会情勢一般を執筆したことである。「僕原稿が、明日ニヒリズムの国に行くのだ」("It [i.e. MS.] goes to-morrow morning for the land of Nihilism.")³と喜ぶ彼に、インテリゲンチアのニヒリスティックな自由主義が

¹ **Letters, p. 82 (August 1880).**

² **Letters, p. 83 (Nov. 3, 1880)**

³ ここに言ふ雑誌は、**1866-1918**年迄つづいたもので、極左と極右の中間をゆく自由主義の西欧主義者の雑誌で、インテリゲンチアの絶対的支持を受け、ツルゲーネフも五十篇の散文詩をこの誌上にもせて援助してゐる。**Gissing**との交渉は、**University College**の**Prof. Beesly**の紹介によつたのである。**Cf. Letters, p. 85 (Nov. 18, 1880), p. 88 (Jan. 16, 1881).** 尚、**Nihilism**の語の出た「父と子」は**1862**年発表。

-- 29 --

見出せるであらう。若し当時のギッシングに確定的な収入の道があつたとすれば、ロシヤから来る僅かの金だけで、彼の作品はムーディ¹の**1881**年の新年のリストにのつたとは言へ、手元に残る程の金額ではなかつた。個人教授の口を求めて、やつと生命をつないでゐたのだ。

ギッシングの言葉を籍りれば、彼の生活は「全く文字通りに重荷を負つて、山をよぢ登る人間。」²のやうなものであつた。「ロンドンで生活苦に喘ぐのは、難破にあつて、一つの舟板につかまれば、又次の板につかまれば、自分の身体を支へて行くのとそっくりだ。」³フレデリック・ハリスンの子供をはじめ、次から次へとロンドンの都会の波間から、舟板を拾つては嘔ぢりついてゐる。バスにのれぬ波は、歩くので、靴は三週間ですり切れる。疲れ切つてはゐても、夜は十一時から一時半まで、ギリシャ・ラテンを読むのだ。⁴あらゆる方法を講じて能率をあげようとする。六ペンスの奇跡⁵を行つて、転々と居を移したのは、友の近くに住み、出教授の時間をはぶく為のみであつたらうか。十人の生徒を教へ、朝の八時から夕の六時まで働く彼を、ひきずり廻したのは、「金」のみで

¹ **Charles Edward Mudie (1818-80)**が、**1840**年に設立した**Mudie's Circulating Library**は、最も代表的な貸本屋である。尚、**Letters, p. 83 (Jan. 13, 1881)**参照。

² **Letters, p. 103 (Aug. 8, 1881).**

³ **Letters, p. 106 (Nov. 23, 1881).**

⁴ *Letters*, p. 95 (March 13, 1881).

⁵ “Sixpenny miracle” — Cf. *The Private Papers of Henry Ryecroft*, “Spring,” III & X.

-- 30 --

はなく、「女性」でもあったのだ。「ああ、数週間何一つ読まない。本をのぞく時間がない。ひなが一日物を教へ、夜は夜で書きつづける。僕は疲れ切った生物だ」 (“Alas, it is weeks since I read anything. I have no time to look at a book. All day I teach, and all night I scribble. I am a weary mortal.”) ¹と言ふ。「どんな労働者の境遇も、自分より以上に不安で有り得ただらうか？」

(“Could the position of any toiling man be more precarious than mine?”) ²

とは、ヘンリ・ライクロフトならぬ彼自身の言葉であらう。この生活苦の体験を経て、思想が次第に変化して行く。一面には 1882 年の秋頃から、彼の生活にも多少の余裕が出来た³からでもあらう。が併し、最も根本をなすのは、この生活苦にも枯れてしまはなかつた彼の本質が、しからしめたのであらう。

先づ第一に挙げる可きは、コント哲学に対する不満が次第に表てに現れて来たことである。「実証主義者の暦」(Comist Calendar) まで使用してみた彼ではあるが、当初から共鳴して居たのは、「人道的宗教」(Religious of Humanity) ⁴であつて、実証主義を真に把握してみたもの

¹ *Letters*, p. 109 (March 8, 1882).

² *The Private Papers of Henry Ryecroft*, “Spring,” IX. Cf. *Letters*, p. 110 (April 3, 1882).

³ Cf. May Yates: *George Gissing, An Appreciation*, p. 2 (Manchester University Press, 1992.):—“The sickness of real poverty Gissing never knew after the year 1882.”—とは言つてゐるが、たいして楽になつたのではなかつたらう。

⁴ Cf. *Letters*, p. 92 (Feb. 11, 1881).

-- 31 --

とは想像し得ない。ともあれ、彼の態度が著しく自由主義的色彩を帯びて来た明かな例は、1882 年九月¹に完成し五十ポンドの印税が入ることまでになつてゐるながら遂に世に出なかつた「山の神の眼のかたき」(*Mrs. Grundy's Enemies*) に添付しようとした、次の序である。——

**This book is addressed to those to whom Art is dear for its own sake.
Also to those who, possessing their own Ideal of social and personal**

morality, find themselves able to allow the relativity of all Ideals whatsoever.²

この書を、芸術を芸術の為に尊ぶ人々に捧げる。そして又、独自の社会及び個人道徳の理想を持ちながらも、如何なるものにせよ、凡ての理想の相対性を許容し得る人々に捧げる。

Art を”for its own sake”に尊ぶと言った態度は、少くともこの頃までのギッシングの口から出るとは考へられない。そして、「自分の進歩の最後の段階」(”the final stage of my development”) ³に到達したと言って居る。この最後の段階が如何なるものであるかを、そして既に 1883 年代に到達してゐたことを特に記すのは、書簡集発表以前のギッシング評論家が筆を揃へてこの思想の変化

¹ *Letters*, p. 119 (Sept. 3, 1882).

² *Letters*, p. 122 (Feb. 14, 1883).

³ *Letters*, p. 129 (July 18, 1883).

-- 32 --

を、遙に後年のことにしてゐるからである。カーライル (Carlyle, Thomas, 1795-1881) からラスキン (Ruskin, John, 1819-1900) へと、彼の関心が推移して行く。カーライルが「晩年の評論」(*Later-day Pamphlets*, 1850) の中で、「多くは愚物の二千七百万」(”twenty seven millions, mostly fools”) ¹と英国民を罵倒し去つたのが、’81 年頃のギッシングに訴へたのであった。ついで、ラスキンの「この後に到る者に」(*Unto this Last*, 1860-62) をあげて、ラスキンがカーライルと相違する点は、ただ一つ「美を尊ぶ」(*worship of Beauty*) ²点であるとなし、美の強調に深く興味を抱きはじめてゐることが解る。ラスキン耽読の後に、更にラスキンの生活にまでくひこんで考察して居る。若しも、ラスキンが貧しくて、生活に追はれて、窮地にもがいて来たとしたならば、「この後に到るものに」に見る様な静かな荘重な態度は持ち得なかつたであらう、——ラスキンが、過激な革命主義に走らなかつたのは、彼が富める階級の出身であつたからであらう——とは言って居るが、何れがよりよき態度であるとも断定してゐない。「絶対的価値を人類に対して持つただ一つのは、芸術的完成である」(”The only thing known to us of absolute value is artistic perfection.”) ³と断定してゐる。彼にとって、「世界は、芸術的に考察し、再現す可き現象の集積」(”a collection of phenomena, which

¹ Cf. *Letters*, p. 89 (Jan. 16, 1881).

2, 3 *Letters*, p. 126 (May 12, 1883).

-- 33 --

are to be studied and reproduced artistically”¹であるとなし、「不幸のどん底に立っても、立ちどまって未来の為にノートをとっておくことができる」(“In the midst of desperate misfortune I can pause to make a note for future use.”)²と言ひ、更に「他人の苦難は、私にとっては、観察の材料である」(“The afflictions of others are to me materials for observations.”)³と言ふに至つては、「ヘンリ・ライクロフトの手記」に見る芸術観人生観と殆ど異つて居ない。「春」のIVとXXを開いてみるがよい。

More than half a century of existence has taught me that most of the wrong and folly which darken earth is due to those who cannot possess their souls in quiet; that most of the good which saves mankind from destruction comes of life that is led in thoughtful stillness.⁴

地上を暗黒にする邪悪と迷愚とは大抵自己の魂を平静に保つ事の出来ない人達から生れ、人類を破壊から救出する福利は、多く思慮ある静穏の生活から来ることを、自分は五十余年の経験から教へられてゐる。

と言ふヘンリ・ライクロフトの徹底した態度に、到達し得るのは容易である。けれども此のつきつめた境地に到るまでには、彼は社会的関心を全然棄て切つてしまはなければならない。社会に対する芸術の直接的影響を、全

1, 2, 3 *Letters*, pp. 128-9 (July 18, 1883).

⁴ *The Private Papers of Henry Ryecroft*, “Spring,” IV.

-- 34 --

く棄て切れたのは更に後年の事である。それ故に、ラスキンの絶望的態度にはあきたらない。自然とモリス (Morris, William, 1834-96) の態度により多くの関心をもつたことであらう。人生の美と社会改造との関係——その融和を追及してゐる。¹そして彼の作品の意図は、決して客観的なものではない。「社会の不公平に私は憤怒する。けれどもその際でも、私の怒りは直ちに方向をとつて、芸術的作品で復讐しようとするのである」(“I can get savage over social iniquities, but even then my rage at once takes the direction of planning revenge in artistic work.”)²と、明かに芸術の直接的道徳的效果を意識的に持って、創作して居る。そして、次第に強められ、昂揚されて来たギッシングの芸術に対する熱意は、殆ど連続的に作品を完成させてゐる。1884

年、フレデリック・ハリスンに生活苦を訴へながらも、「若し三・四の作を完成するまで、行き通せたならば、他人に認められるだけに個性のにじみ出た何ものかを残したと自覚し得る満足が得られるであらう」(“If I can hold out till I have written some three or four books, I shall at all events have the satisfaction of knowing that I have left something too individual in tone to be neglected.”)³と書いてある。

¹ *Letters*, p. 135 (Feb. 14, 1884):—“I would make a point of the necessary union between in life and social reform.”

² *Letters*, p. 139 (June 12, 1884).

³ Cf. Swinnerton: *George Gissing*, p. 45.

-- 35 --

ギッシングの第二作「宿なし」(*The Unclassed*)¹は、1883年十二月に完成した。チャップマン・エンド・ホール (Chapman & Hall) 社におくり、当時同社の出版顧問 (publisher's reader) であったジョージ・メレディス (George Meredith, 1828-1909) の眼を通つて、翌年六月に世に出た。「日常凡々の生活を描いた小説は、もはや陳腐だ。我々は更に深く掘り進んで、何人も未だ手を触れぬ社会層にふれねばならぬ。ディッケンズはこの点を意識してゐたが、彼には眼ざす主題に直面する勇気がなかった。その筈、彼の月々の連読物は、家族団欒の茶卓の上にのらなければならなかったのだから」(“The novel of every-day life is getting worn out. We must dig deeper, get to untouched social strata. Dickens felt this, but he had not the courage to face his subjects; his monthly numbers had to lie on the family teatable.”)²と言ふ彼が、社会層の奥深くくぐって、描き出した男女は、如何なる階級にも属し得ないものであった。男性は、教養はありながらも生活費を得る手段のないものであり、女性は、街路に春をひさがざるを得なくさせられて居るのである。

アイダ (Ida) とハリエット (Harriet) とモード (Maud) の

¹ この作は相当の売行があつたらしく、1895年に改作して、三冊本であつたものを一冊にして Lawrence and Bullen 社から出版してゐる。作者自身の“Preface to The New Edition”に依れば、“Unclassed”の意味は *déclassé* (落伍者) の意味ではなく“a limbo external society”に住居してゐるものを指したのである。

² *The Unclassed*, Chap. XV. 尚、*Letters*, p. 83 (Nov. 3, 1880)に Dickens に対する同様の見解がある。

三人は、幼い頃からの友達であった。アイダの母は淫賣婦ながらも、自分の娘は何としても教育をうけさせて、この境遇から救ひ出さうとする。けれども、アイダは母の商売故に学校も追はれ、やがて母と同じ境遇におちる。ハリエットは、母を早く失ひ父の手一つで育つた我儘娘であった。彼女の家にはハリエットの母と妹と伊太人との間に出来て、ローマに生れたジュリアン・カスティ (**Julian Casti**) と言ふ男の子がゐた。ハリエットはジュリアンと、「結婚してくれ」と言ひのこした父に死なれて、路頭にさま迷ひ出る。そこにウェイマーク (**Waymark**) と言ふ、嫌々ながら学校教師になった青年が出て来る。作家を志しながらも、作品は売れず、共に文学を談ずる友もなく、孤独寂寥の余りに新聞広告を出して話相手を探す。自分の生れたローマに憧れ、独り余暇をさいては古典を求めてゐたジュリアンが応募する。しかも、奇妙なことには、ウェイマークはアイダを知つてゐるし、アイダは彼を愛し、――更にはウェイマークはモードとも近づきになり、モードを恋する。モードは禁欲主義的な厭世観に宗教観を注ぎこまれてゐたが、ウェイマークの努力で次第に眼が開かれて来る*が、遂に結婚を断念する。一方中ジュリアンは、約束を迫られ誘惑にのせられて、

* Cf. Yates: **George Gissing**, pp. 74-5. ギッシングの一つの傾向として、個性の説明のために、文学的作品を借りる場合が多いが、**Chap. XXVI** の **D. G. Rossetti(1828-82)** の引用 (*The House of Life*, v. & xvii) などその著しい一例である。

ハリエットと結婚したが、だらしのない彼女の為に、生活を台無しにされる。このハリエットの描写は、ギッシング自身の体験に根ざしたものか、実に精密に如実に描かれてゐる。ハリエットはアイダと再び交るに至つても、事毎に相手をおとし入れ、遂にはアイダを入獄せしめ盗人にしてしまふ。ウェイマークはアイダに対する同情から、モードの決心を幸ひにアイダと結婚する。

この一篇は、構造から見れば、明らかに無理があるが、作者の貧者のどん底を見る眼が著しく客観的になり、性格把握の力は読者に迫るものがある。屢々ウェイマークは、作者その人であると言はれてゐるが、作者はウェイマークは決して自分ではなく、「一つの個性の探求」¹ であると言つてゐる如く、確に客観的態度を保持し得てはじめて出来得る迫真力がある。後年作者自身この作を、「ロマンティックな精神で、人生の暗黒な事実につかつた」² 年少の作家の作品であるとみなしてゐるが、グラッドストーンが、「思索的教訓的種類の小説」³ であると評してゐるやうに、考へさせられる作品である。読者を考へさせる

のが、ギッシングの作品の特徴である。ギッシングの作品の本領は、ウェイマークの次の言葉につきる。——「須らく芸術家たるものは、苦難の最も甚しい時でさへも、

¹ *Letters*, p. 140 (June 23, 1884):—“Waymark is a study of character.”

² “Preface to the New Edition.” (*The Unclassed*. 1895.)

³ *Letters*, p. 214 (May 4, 1888):—“A novel of the speculative and didactic class.”—と言ふ批評を、ギッシングは是認してゐる。

-- 38 --

自己の苦難を作品の素材たらしめ得る者でなければならぬ。」(“The artist ought to be able to make material of his own sufferings, even while the suffering is at its height.”)¹そして、彼の代表作「当世三文文士街」(1891)や「漂泊の生涯」(*Born in Exile*. 1892)の骨組は、凡てこの一作にあると言ひ得る。²

1884年の夏、フレデリック・ハリスンの二子をつれて、珍らしくもロンドンを去って、湖畔地方(Lake District)に遊び、詩人の古蹟をたづね、健康と詩藻を貯へて帰ったのであった。秋にはロンドンの社交界にも顔を出してゐる。「僕は寂寥に苦しめられて来た、だが、今では、とに角、自分だけの時間を見つけるのが困難なのだ。」³——彼が波に乗って来たことが解る。’84年の暮には、居を移して、少くも三年は此処に住まへるのだと、彼の求めてやまなかつた「独立と隠棲」(“independence and seclusion”)⁴が、形なりにも手に入つたので、殆ど間断なく創作し、非常な読書振りである。後年当時を回想して言つてゐる。「1885年の六月から1886年の三月までの間に、三つ小説を書いた。『イザベル・クラレンドン』と『人生の朝』と、

¹ *The Unclassed*, Ch. XXV.

² Swinnerton: *George Gissing*, p. 61:—“It was upon a framework of his own sufferings that Gissing reared his best work; when he no longer suffered, the quality of his work deteriorated.”

³ *Letters*, pp. 149-50 (Oct. 26, 1884).

⁴ *Letters*, pp. 151 (Dec. 23, 1884).

-- 39 --

そして『群衆』。そして『神曲』を読了したし、個人教授で生活を保つてみたで

はないか！」¹

第三の作品「イザベル・クラレンドン」(*Isabel Clarendon*)²は、1886年の九月に出版になった。1885年の八月には完成してゐたのであったが、メレディスの忠告に従って、在来の三冊本の形を破つて、³二冊に書きなほして世に出た。

バーナード・キングコット (**Bernard Kingcote**) は、若い僧侶で常に貧民に接してゐる上に、作者その人のやうに性来多情多感であつて、わびしさの余りに華美なイザベルの愛を求める。貧に疲れたバーナードは、ただいらいらと彼女の客間で、嫉妬の思ひを抱いてゐる。若し彼が強く言ひはれば、彼女も亦共に故郷に帰る心持になつてゐたのに、ただ男性と話して居たと言ふだけのことから、バーナードは狂つてしまふ。

筋は大体、かうしたものであつて、メレディスが忠告したやうに、彼の書きなれて居る下層階級を棄て去つたが為に失敗はしてはゐるが、はじめて彼の筆が田園に向けられ、冬の雨の描写にラスキンを思はせるものがある

¹ *Letters*, p. 184 (April 24, 1889)—最初の伊太利旅行より帰つた直後のことである。「人生の朝」(*A Life's Morning*) は 1888 年になつて出版。

² 此作は今日では用意に手に入らぬので、私は **Swinnerton** に依つて (pp. 90-1) 書いた。

³ Cf. *Letters*, p. 157 (June 1885). 尚、p. 165 に三冊本の習慣がこの頃から廢れた事について、感想を漏らしてゐる。

-- 40 --

り、はじめて彼が社会小説から、性格小説に筆をそめたものとして興味がある。メレディスは、ギッシングが自己在来の世界を棄ててゐるのを見て、彼らしい鋭い眼識をもつてその非を忠告し、²若しギッシングが在来の自己の世界を追及しつづけたならば独自のものを完成するだらうと言つてゐる。次に自分が筆をとる作品は、「群集」(*Demos*)³と言ふ題にするのだと、即座に考へを向けたいらしい。自ら労働者階級に対する風刺であると言つてゐる。この作を述べる前に一つの事件を伝えた手紙³を紹介しよう。

当時の青年を動かしてゐた人であり、ギッシング自身多大の関心を抱いてゐた、モリスが拘留された事件である。私が例証せずとも、読者は 1930 年代の日本に、この事件に類似のことを、容易に見出し得るであらう。

・ ・ ・ Do you see the report of the row the Socialists have had with the police in the East End? Think of William Morris being hauled into the box for assaulting a police man! And the magistrate said to him;

“What are you?” Great Heavens! Morris answered: “I am an artist and man of letters, I believe tolerably well-known throughout Europe.” . . . It is painful to me

¹ Cf. A. C. Gissing: *Selection from the Works of George Gissing*, pp. 63-4.

² *Letters*, p. 172 (Oct. 31, 1885). Meredith は又、Thomas Hardy が Wessex の農民以外を描いた時にも、同様の忠告を与えてゐる。

³ *Demos* に着手以前に、Meredith の影響の明らかに見える「人生の朝」を完成してみた。

⁴ *Letters*, pp. 168-69 (Sept. 22, 1885).

-- 41 --

beyond expression. Why cannot he write poetry in the shade? He will inevitably coarsen himself in the company of ruffians.

Keep apart, keep apart, and preserve one's soul alive — that is the teaching for the day. It is ill to have been born in these times, but one can make a world within the world. A glimpse of the morning or evening sky will give the right note, and then we must make what music we can. ...*

．．．イースト・エンドで警官と社会主義者が騒動を起した記事を君は見たかね。考へても見給へ、ウィリアム・モリスが警官殴打の廉で豚箱にぶちこまれたのだよ！判事が彼に尋ねた——「お前は何者だ？」飛んでもない！モリスの返事はかうだ、——「私は芸術家であり、文人である、いささか全欧州に知れ渡つてゐると信じます。」．．．僕には、何とも言へぬ痛恨事だ。何故彼には、木陰に隠れて詩が書けないのだらう。無頼の徒に伍して居れば、何としても自己を低下することになるであらうのに。

離れて、遠く離れて、そして澁刺たる魂を保て！——これが現代にとつての教訓だ。かうした時代に生れたが因果なのだ。だが、人は現世に居て、その中に自己の世界を建設し得るものだ。暁の空、夕の空を一目見ただけでも、正しい調は与へられるであらう。そしてその時、我々は力を尽して、樂を奏でねばならない。．．．

* この事件は、モリス五十二歳の時のことであつて、J. W. Mackail の *The Life of William Morris* (Longmans, Green and Co. 1920. New Impression) の

vol. II, pp. 146-7.)に詳細な記述がある。

-- 42 --

此処に彼の行く道が暗示されてゐる。けれども、よく現実を克服しつづけて、力強い創作を為すことは、メレディスに心酔してその模倣作までなしてゐても、ギッシングの為し得る所ではなかった。メレディスの力強い笑ひは、ギッシングのゆがめられた微笑と比較す可くもない。

『群集』は相当の作になるであらう」*と言ひながら、1885年十一月から1886年三月に亘って、非常な意気込みで執筆したものである。その筋を書かう。

裕福な実業家が突然死去したが、その遺言状が発見されない。遠縁にあたるリチャード・ミューティマ (**Richard Mutimer**) と言ふ貧しい社会主義者の手に、思ひがけぬ遺産が入ってしまった。彼は先づその遺産の一部を成す或る土地に、理想郷を建設して労働階級改善に資する。その地方の自然を破壊し去って、一産業都市を建て、産業組合を作つて、自らその組合長となる。この境遇の激変は彼を誘惑する。その地方の社交界に入ると、そこには彼の未だ接したこともない立派な娘アデラ・ウォルサム (**Adela Waltham**) がゐた。アデラは、単なる宗教的愛情から、唯物的なリチャードの社会観に共鳴し、着々と実行するリチャードを偶像化し、遂に婚約する。けれどもリチャードには既に、同じ階級のエマ (**Emma**) と呼ぶ婚約者があつた。エマはリチャードの幸運を聞いても、――「お金のことなんか考へたこともないの、あなたの妻にな

* *Letters*, p. 174 (Nov. 22, 1855):—“*Demos will be something.*”

-- 43 --

れば、それで沢山よ」¹――と答へる純真な娘である。リチャードは平然と古い疊でも棄て去るやうに、この処女をすてて、アデラと結婚する。作者は、ここに労働者階級の「致命的欠陥」(“**fatal defect**”)を示す。リチャードのやうに、他人の境地を思ひみることの出来ない点、同情のないのが、彼等の大欠陥である。それは性質にも依るが、知的訓練に依つて生れるものであると言ふ。²しかも、リチャードは労働階級と、アデラの育つた資本階級との間の、くさびになるのだと得々としてゐる。けれども、紛失したと思つた遺言状が、教会の裏の部屋から発見されて、リチャードは理想郷を棄ててロンドンに去る。そして寄付金――労働者の汗から生れた金で、イースト・エンドで労働運動をつづける。けれども、不幸は必ず一度では終らない。弟妹に苦しめられるばかりでなく、時代と共に急激に転向する社会運動の渦中であつて、彼のやうな不徹

底な利己的な態度は民衆に容れられぬばかりか、次第に信用を失って、寄付金横領の疑をうける。アデラは自ら群集の前に立って、夫の潔白を叫ぶ。このアデラに向って、リチャード・ミューティマは何と叫んだか、——「僕は動物だった。若し僕が、あなたが育ったやうに育てられていたら——そこが二人の相違なんだ。」³ 一度怒

¹ *Demos*, Chap. V.

² *Demos*, Chap. X:—”The fatal defect in working class is absence of imagination... ..which in most of us owes so much to intellectual training.”

³ *Demos*, Chap. XXXV.

-- 44 --

った **Demos** は動物である。弁解するミューティマの言に耳を傾けず、彼を襲撃した。逃げこんだのが、所もあらうに彼のその昔の愛人エマの貧しい家であった。窓から顔を出したその時、石が飛んで来てエマの腕に抱かれて死ぬ。

作者の意図が、「商人根性のしみこんだ」(**infused with the spirit of shopkeeping**)¹ 英国社会主義の罵倒にあり、同時に労働者階級の無教養を責めるにあることは、容易に看取し得るであらう。階級の対立の原因が、経済力にあるのか、教養にあるのか。作者の態度は、決して確固たるものではない。ただ、ワイヴァーン (**Wyvern**) と言ふ牧師の見解が、ギッシングその人の見解であると考へられる。個人としての労働者階級に属する者に、十分な同情を抱きながらも、階級全般に対しては反感恐怖を抱いてゐるのだ。この書は、**1886** 年ごろの社会情勢² に適応したがために売行が好かったが、決して社会小説ではなく、むしろ性格描写である。「英国社会主義物語」(**A Story of English Socialism**) と又の名があっても、そのすぐれた点は、むしろ他にある。リチャードの母は、おそらく彼の他の作品中にその比を見出し難い非常にすぐれた貧民心理の描写である。息子の手に入った富を信ぜず、昔に変らぬ生活をつづけ、息子の棄て去ったエマの面倒を見

¹ *Demos*, Chap. XXIV.

² Cf. Morley Roberts: “Introduction” (*Demos*. London: Eveleigh Nash & Greyson. 1928.) Hyndman, John Burns, Champion 等の運動の最もはげしかったのは、**1885, 86** 年である。

-- 45 --

る。しかも決して感傷に流れず、飽くまでもリアリスティックな筆を揮った、

ギッシングの最も成功した貧民描写であらう。¹そして、ギッシング自身がア
デラを得意としてゐるのは、²彼の一面を語る面白い事実である。

1886年三月、「群衆」を完成するや否や、彼ははじめて海峡を渡った。一個
月余の仏国滞在の後、直ちに筆をとって、翌年一月に完成したのが、次に世に
出た「サーザ」(*Thyrza*)³である。「群衆」に於て示した性格描写を更に繊細
に動かし、全篇に夕闇につつまれた如き感を与へてこの一篇をなしたのである。
姉リディア (*Lydia*) と一緒に貧困に暮らすサーザの生活に、淡い夕空の光り
のやうに恋がきざし、愛の小波が立つのだ。陋巷のマドンナ、サーザを描いた
ものである。

この一作を考察する前に、当時のギッシングの態度を一瞥してみる必要がある。
「私を最も助けてくれるのはフランスとロシヤの作家である。私には英国流
の見解には、たいして同情が持てない。だから自分の作品が世間に受けるだら
うとは、とんと考へられないのだ。衆愚は

¹ Cf. Swinnerton: *G. Gissing*, p. 88 及び Yates: *G. Gissing*, p. 71. 尚、
1886年(明治十五年)に出版になったこの書が、如何に現代日本に類似した事
件を描いてみたかを見るのは、興味あることであらう。ハリスン、モーリ等社
会学者から賞賛をうけたのは言ふ迄もあるまい。

² Cf. *Letters*, p. 181 (May 21, 1886).

³ Cf. Thomas Seccombe は、*Thyrza* を *Demos* より以前に執筆したのであ
らうと言つてゐるが、("An Introductory Survey" to *The House of Cobwebs*, p.
xviii) 明らかに誤りである。Cf. *Letters*, p. 179 (April 28, 1886).

-- 46 --

彼等の趣味に適した作家に行くだらう。・・・よい文学が兎も角も自分の立場を
保つのに、苦闘しなければならぬ時期に際会しつつあるのだ¹と言ふが、ギ
ッシングが珍しくも、真よりも美を描かうとしたこの作品が、何故に英国民に
受けないのであらうか。世紀末への過渡期を意識しつつあるこの作家の傑作と
して「サーザ」を推してゐるスウィナートンに、「夜曲」(*Nocturne*, 1917) の
作のあるのは面白い事実である。読者は、「夜曲」とこの「サーザ」一篇との比
較から、興味ある時代の推移を看取されるであらう。スウィナートンのすぐれ
た梗概²によって、この一作の筋を記してみよう。

富裕な教養豊かなニューソープ (*Newthorpe*) は、母親をなくした娘アナベル
(*Annabel*) と暮らしてゐる。ロンドンのラムベス (*Lambeth*) の実業家の
息子であり、社会改良を志してゐる青年ウォルタ・エグルモント (*Walter
Egremont*) の噂をしてゐると、突然その青年が訪問する。エグルモントは時
期を見計らつて、アナベルに求婚する。彼女はラムベスの労働者を教化しよう

と言ふエグルモントの計画を鼓舞してはゐたが、彼を愛してはゐなかつた。エグルモントは、ロンドンに帰って講演に依つて教化の目的を達しようとする。彼の最初の講演に出席した中に、ギルバート・グレイル (**Gilbert Grail**) と言ふ男と、ルーク・アクロイド (**Luke Ackroyd**) と言ふ二人の男がゐた。

¹ *Letters*, p. 183 (July 31, 1886).

² *Swinnerton: G. Gissing*, pp. 66-73.

-- 47 --

グレイルは三十五歳。非常に読書好きな蠟燭工場の職工であつた。アクロイドは、その反対に、応用科学に非常な興味を持ってゐた。アクロイドは一度で講演会出席を止めてしまった。アクロイドは、グレイルと同じ宿に、姉リディア (**Lydia**) と共に住むサーザを恋してゐた。サーザもアクロイドが好きだつた。サーザ姉妹は、帽子製造の女工であつて、彼女の知つてゐる人々はオーモンド夫人 (**Mrs. Ormonde**) と言ふ慈善事業家以外、凡て貧しい人々であつた。このオーモンド夫人が、不思議なことにエグルモントの知人である。一方エグルモントは労働階級の知的解放に専念してゐたが、自己の事業の効果が思はずしくなつて来たのを、意識しはじめてゐた。けれども、グレイルと言ふ好人物 (全くギッシングの好きさうな人物) と知己になつた。グレイルの手引きで、金はあるが鼻っばしらの強いバウアー (**Bower**) と言ふ人物と接近する。種々の人々の助力で、エグルモントの計画が、公開図書館、読書室と言ふ具体的の形をとつて来た。彼はグレイルを図書館員に頼んだ。やつと独立の計画が獲られることになつたグレイルは、サーザに結婚を申し込む。サーザも心よく受け入れる。サーザは、図書館がみたくてならず、独り公開前の建物に入つてみた。エグルモントが、到着したばかりの書物の箱を開いてゐた。サーザの美しさに魅せられて、彼女の言ふままに手伝をさせた。彼はグレイルをおどかしてびっくりさせるのだから、本の到着した事を内密にしておけと言ふ。その為、エグ

-- 48 --

ルモントに会つたことを、何と言ふ気もなしにグレイルにかくしてゐた。うかうかと二度も図書館に行く。そして彼に会つた。ところが、人もあらうにバウアーに、エグルモントと一緒に出来た所を、見つけられてしまった。噂がひろまる。サーザは意を決して、エグルモントに意中をうち開ける。彼女を愛してはゐるが、グレイルを裏切ることは出来ぬ。サーザを棄てて独りジャージ (**Jersey**) に去る。サーザも家出。世間は二人を結びつけて、あらぬことを噂する。グレイルはオーモンド夫人からジャージのエグルモントの居所を聞いて

わざわざでかけるが、既に其処にもゐない。サーザは、飲食店で働いてゐる内に、病みついてしまった。そしてオーモンド夫人の田舎の家で病を養ふ。エグルモントもロンドンに帰り、精神失神状態にあるグレイルを見出して、自己の立場を釈明し、共にサーザを探す。やっと、オーモンドの家にもゐることをつきとめる。エグルモントがオーモンド夫人に、胸中をうちあけて話してゐるのを、サーザが立聞きする。そしてサーザが彼の妻になり得るだけの教養をつむ間二年間エグルモントはアメリカに行くことになる。サーザには一目も会ひもしないで。若しその頃までも彼の恋がつづくならば、自分もこの結婚に反対はすまいと、オーモンド夫人が言ふ。その夫人の言ひつけを、サーザは何でも恋故に受け入れる。声楽の勉強に余念がない。二年が過ぎて、人知れずエグルモントの帰りを待ってゐても、彼は彼女の許には来なかつたのだ。彼は直ちにオーモンド夫

-- 49 --

人を訪問したのだ。だが夫人には別の考へがある。今はアナベルが彼に心を動かしてゐるのを見、そして彼女の方がよりよい彼の配偶者であると考へて、エグルモントと彼女を接近せしめようとする。サーザはもうすっかり元気で愉快さうに暮らしてゐますと言ふオーモンド夫人の言葉から、彼は彼女の恋が既に消えたと考へる。彼の行く所はアナベルである。サーザはオーモンド夫人を訪問して、一切の事実を知り、ロンドンに帰ってグレイルの胸に抱かれる。姉リディアはアクロイドの妻に。そして、今は情熱も消え去つたエグルモントとアナベルは、ただ尊敬と同情故に結婚する。この精微な貧しいマドンナ物語は、筋書きとは甚だ異つた印象を読者に与へるであらう。サーザとリディアは、「小説の中に見る最も快い人物になるであらう」(“**They will be two of the most delightful characters in fiction.**”) ¹と作者の言ふ程、心にくい娘である。サーザはやや理想化され過ぎてゐる。この姉妹が髪を結ぶ時、²サーザの髪は黒く光って、この世のものとも思はれなくなる。リディアは言ふ——「サーザ、あたしには、お前なしには、暮せないんだよ。さあ、いつものやうに、ちゃんとキスしておくれ」——「姉さんに髪をさはって貰えるだけだつて、私は何処へも行きはしないの。姉さんのやはらかい手が、ほんとに好きなんだもの」と言はれて姉の差し出す手は、荒れてゐた。リディアの描

¹ *Letters*, p. 186 (Nov. 22, 1886).

² *Thyrza*, Chap. V.

-- 50 --

写の方が、サーザに比してむしろ如実である。全篇が街路に開く手風琴¹の情

緒である。決して「社会が全力を尽くして個人から奪取しようとする日々のパンを求める闘争」(“**the battle for the day’s food of which society does its best to rob each individual.**”)²を描いたものではあり得ない。若しも、そこまで突き進んで如実に書いたならば、この作品は英国で世に出る事は出来なかったであらう。「サーザ」一篇の薄明の境地も、ほろにがい涙も、英国の大衆には向かない。ディッケンズのやうに朝日を浴びた境地でなければいけないのだ。過渡期のディッケンズとも言ふ可きギッシングとしてはやむを得ないことではあるが、今少しの近代的手法による簡明な描写と、構造の整理を加味したならば、スウィナートンの処女作とも言ふ可き「夜曲」よりもまさり、現代にも生き得る作品である。

次作「人生の朝」(*A Life’s Morning*)は、1888年十一月に世に出たものではあるが、既に早く1885年十一月に完成してゐた。³見事な書き出しに反して、後半は徒らにつぎ合はせた興味索然たるものになってゐる。それも出版者の要求に従って、やむなく筆を曲げたものらしい。た

¹ Cf. *Thyrza*, Chap. IX.及び *Letters*, pp. 130-1 (Aug. 9, 1883):—“An organ is always an assistance to me in doing any kind of mental work.” 作者の索莫たる心境がみられる面白い事実ではあるまいか。

² *Thyrza*, Chap. XXXI.

³ *Letters*, p. 173 (Nov. 4, 1885); p. 242 (Nov. 15, 1888).

-- 51 --

だ注意すべきは、多くの批評家が指摘するやうに、¹次第に一般的にも認められて来たメレディスの直接の影響がある点である。メレディスの影響は他の作にも認められるが、この作は明かに、「リチャード・フェヴェレルの試練」(*The Ordeal of Richard Feverel*, 1859)の影響がある。

話は、ウィルフレッド・アセル (*Wilfred Athel*) と言ふ大学生と、その家の家庭教師エミリ・フッド (*Emily Hood*) との恋物語である。リチャード・フェヴェレルに対する父の特殊な教育方針をメレディスは取り扱ってゐるが、ギッシングはエミリを、屢々彼が取扱って来た様に、教育を受けたが為に自己の育った環境からは離れ、何処にもゆけぬ、漂白の生涯を送る女性として描き出している。即ちこの一篇は、女性の「漂白の生涯」なのである。身体を害して学校を休んで帰宅してゐたアセルが、エミリを求めて恋い慕ふ。けれども一家をあげてこの結婚に反対だ。エミリの父は貧しい会計係。ふとしたことから、金を使ひこんで、その自責の念から我と我が命を断つ。母も亦後を追ふ。エミリは姿を消す。アセルは恋のいたでを、心にもない政争裡の荣誉にまぎらし、やがて身分いやしからぬ冷たい女、ベアトリス・レッドウィング (*Beatrice*

Redwing) と婚約する。ところが、彼女はやがて、彼の恋が外面的なもので、婚約後もエミリの手紙を大事に

¹ Cf. W. T. Young: "George Gissing" (*The Cambridge History of Eng. Lit.*, vol. XIII, Chap. Xiv, p. 460) 及び Thomas Seccombe: "An Introductory Survey" (*The House of Cobwebs*, p. xxiii).

-- 52 --

しまつてゐるのを発見する。ふとしたことから、アセルが影のやうに生きてみたエミリを発見する。若しも読者が、文字で描いたシャヴァンヌ (Puvis de Chavannes, 1824-98) の絵が見たかったならば、「木陰の散歩道」(Chap. XXII, —"Her Path is the Shadow") を開いてみるがよい。二人の恋は昔に変わらぬ。ベアトリスが断念する。むしろ話の興味は、エミリの父とその主人とのいきさつにある。情欲の奴隷のやうな彼は、エミリほしさに、彼の女の父の貧を知つてゐて、見事にわなにかける。読者をひきずつては行くが、決して作品の気品をあげる挿話でもなく、ギッシングとしては珍しい手法でもない。

この作品の廉価版は容易に手に入る。それだけ今日でも世間にうけてゐえうのであらう。けれども、作者は「コーンヒル誌」(*Cornhill Magazine*)¹ 上に連載中に、こんな風に言つてゐる。——「『コーンヒル』の作品は、胸くそが悪い。どんどんひどく行つて行くやうに思ふ。ただ早く忘れ去られてほしいと思ふだけだ。」² おそらく作者は、エミリを最後まで生存せしめる意思はなかつたのであらう。³

ついで 1889 年、彼の最も強烈な作品「どん底」(*The*

¹ 1860 年発刊。Thackeray をはじめ、Arnold, Gaskell, Trollope, Hardy 等もこの誌上に発表してゐる。

² *Letters*, p. 209 (Feb. 18, 1888).

³ Cf. Morley Roberts: "Introduction" (*A Life's Morning*, London: Eveleigh Nash & Grayson. 1928).

-- 53 --

Nether World) が世に出た。この光もなければ微笑すらない作品は、作者自身の煉獄の生活から生れ出たものである。幾度か書いては棄て去り、明らかにこの策に着手したと思はれるのは 1888 年三月の事であり、心痛と病苦と戦つて完成したのは同年七月である。¹ ただひた向きに生きるより外何も知らぬ獣の

やうな人間、一一冬になって雪でも降れば、我と我身を暖めて辛うじて生きてゐる貧民街。クラーケンウェル街 (**Clerkenwell Road**) の描写は、行きづまる思ひをさせずにはおかない。このどん底に、一篇の物語をなすやうな波紋を起すのは、金である。金であると共に野獣のやうな人々の眼を醒まさせる教育である。所謂「国民教育」(**State Education**)²の波が、このどん底にも寄せて来るのだ。作者はこの作の題辞としてルナン(**Renan, Ernest, 1823-92**)が1889年仏国翰林院 (**Académie Française**) でなした講演から、³次のやうな言葉をひいてゐる。一一「汚物を描いても、若しもそこから麗しい花が咲き出すならば、描いても宜しい。さもなければ、汚物は排除するのみだ。」(**"La peinture d'un fumier puet être justifiée pouvu qu' il y pousse une belle fleur; sans cela, le fumier n'est que repussant."**) どん底に咲く娘ジェイン・スノウデン (**Jane Snowden**) と、どん底

¹ *Letters*, p. 211 (March 19, 1888), 及び p. 220 (July, 1888).

² *The Nether World*, Chap. IX.

³ Cf. Morley Roberts: *The Private Life of Henry Maitland*, p. 128.

-- 54 --

に生まれて清く生き抜くシドニ・カークウッド (**Sidney Kirkwood**) が、浮藻のやうに漂ふ様を描き出した、くらいくらい物語を、筋だけで読者に知らせなければならぬ。苦しい物語ではある。けれども、一読の後、頭をあげてより高きものを求めしめずにはおかない作品である。

ジェインは父に置き去りにされた娘だ。彼女に雨露をしのがせてくれるペコウヴァー (**Peckover**) 母娘は、涙のない動物だ。ただジェインをいたはってくれるのは、同じ家に部屋借りをしてゐるヒュエット (**Hewett**) の娘クレアラ (**Clara**) と、クレアラを愛するシドニ・カークウッドの二人だけであった。思ひがけなく、ジェインの祖父が、海の彼方から大金を持って訪問する。ジェインはこの祖父の手に抱かれて、今の今まで夢にも思はなかつた安楽な生活に入る。祖父は、貧に生まれて貧に育つた自分の生涯を反省して、その子から受けついで大金を貧民救済に着実に用ゐようとする。孫娘ジェインを可愛がってくれてゐたシドニ・カークウッドを、何よりの手助けに思ふ。そのシドニは何かと愛するクレアラの一家の為に尽して来た。クレアラは聴かぬ気の虚栄心の強い女。その父は多少自覚した労働者で、所謂「教育」を娘にする人間であった。「読みも書きも出来ない人間だったら！自分の手で働いて、日々のパンをかせいだりしないですむなんていい事が世間にあるのを、一度も聞かされたことがなかつたらねえ！」(**"I wish I could neither read nor write! I wish I had**

-- 55 --

Never been told that there is anything better than to work with one's hands and earn daily bread!")¹と、幾度か泣く娘である。この娘は、光りを求めてどん底から飛び出し、やがて女優の群に身を投じる。カークウッドの心は、やがてジェインに移る。だが、正直なカークウッドは、シドニの手に大金の入る事を、恋を打ち明ける以前に聞きこんで、金ゆえに恋を求めると思はれる恐怖から、ただ焦燥に日を送る。所が、死んだと思ったジェインの父が、再びロンドンに現れて来て、昔我が兒を置き去りにしておいたペコウヴァー一家を訪問する。既にジェインの手に大金の入ることを聞き知ってゐた母と娘は、よい鴨とばかりに迎へる。娘クレム (Clem) はすざましい女だ。²母は娘をそそのかす。無頼のクレムは見事にジェインの父を捕へて結婚する。賈金づくりの名人ボップ・ヒューエット (Bob Hewett) が、クレムの相棒だ。ボップは両親の言ふことも聞かず、どん底に何も知らずにうちしぼんで行くやうなペニロウフ・キャンディ (Pennyloaf Candy) を妻にはして見たが、すぐに嫌になって、ぶってけって、そして家を外に飲み歩く。クレムとボップの智恵をしぼっても、ジェインの父には敵し得ない。老人は次第に籠絡されて行く。一方、姿をかくしたクレアラが、仲間の女優の嫉妬から、

1 *The Nether World*, Chap. IX.

2 *The Nether World*, Chap. I:—"Civilization could bring no change against this young man; it and she had no common criterion."

-- 56 --

硫酸を顔にかけられて、再び家に戻って来た。昔の彼女には見られなかったやさしさが、「やさしさのない事」"defect of tenderness"はギッシングに従へば、貧民階級の致命的欠陥なのだ¹）、次第にあらはれて来てゐる。清く弱いシドニ・カークウッドは、クレアラを抱きしめずには居られなかった。結婚して、ヒューエット一家を双肩に荷ふ。ジェインは、祖父に死なれ、殆ど凡ての金を父にうばはれて、独り淋しくどん底に麗しく咲く。彼女のどん底の歌を思ふ時、読むものは、彼女の運命が、こんなことになる位ならば、クレムの足に蹴飛ばされてゐる方がよかつたのではあるまいか、——こんな悲痛な思ひをさせるのも、一つには金、二つにはカークウッドの目ざめた心にふれたからであると、思はざるを得まい。

ジェインは決してサーザのやうに、陋巷のマドンナと偶像化されてはゐない。現実の娘だ。この作の人物は凡て、見事に書きわけられ、個性化されてゐる。ことにペニロウフ・キャンディの如きは、独自の存在だ。²けれども、作全体に動きがない。物語の推移に必然性が感じられない。ジェインの祖父の突然の出現からはじまる、幾多の不自然な構造から来るよりは、もっと根本的な作者の

態度にその原因があると思ふ。「文明世界の中で、最も独創力のない、もっとも物の言へぬ人間、ロンドンの貧民

¹ *The Nether World*, Chap. XXXII を *Demos*, Chap. X と比較せよ。

² Cf. Swinnerton: *G. Gissing*, p. 79.

-- 57 --

階級」¹が、「屈従に屈従をかさねて、最後の安息の日まで戦ひ」²つづけるどん底のひた向きな生命の流れは、残念ながら感じられないのである。か細い灯をつけて、どん底をのぞいて幾人かを眺めて来たのがこの作家である。ギッシングと言ふ余りにも神経質な貴族的な男が、どん底の臭気に鼻をおさへながら、書く為めに止むなくのぞいて来て、その不愉快をぶちまけて見せたのが、この作であるとでも言ひたい。事実、クラーケンウェル・グリーン (**Clerkenwell Green**) をたづねた時、彼は群集を罵倒してゐる。「デモクラシーがその所期する力を発展しつくさない内に死にたいものだ」 (“**May we not live long enough to see democracy get all the power it expects!**”) ³と叫ぶ人間に、貧民にも腹からの笑ひのある事が解らうか。「英国の貧民は、死ぬまで諧謔を弄し、死にかけながらもふざけてゐる。」⁴ギッシングには、それが理解できても、ただ生き、ただ笑つてゐる群集を軽蔑せずには居られないのだ。八月の銀行休業日 (**Bank Holiday**) の群衆描写を、ゾラ (**Zola, Émile, 1840-1902**) に比較してゐる人もあるが、⁵私にはどうしても、作者の冷たい批難が

¹ *The Nether World*, Chap. V:—“The London poor, least original and least articulate beings within the confines of civilization.”

² *The Nether World*, Chap. XI.

³ *Letters*, p. 199 (Aug. 27, 1887).

⁴ Cf. Swinnerton: *G. Gissing*, p. 97:—“The English poor makes jokes until they are dying, and when they are dying.”

⁵ Cf. Yates: *G. Gissing*, pp. 37-9 及び Thomas Secombe: “An Introductory Survey” (*The House of Cobwebs*, pp. xxxviii-xxxix).

-- 58 --

行間に見えてならない。要するに、この作は、光りのない笑ひのないどん底に、じっと淀んでゐる人々を思はせはしても、盲目的に生きる群衆の流れがないものだ。

「今年の十一月で満三十歳だ。さうだ、スコットもサッカレも四十になるまでは何もしなかった。そして、その後に偉大な仕事をしたのだ。」¹——若し自分に更に十年の生命を与えてくれたならば、現代作家の髓一になって見せると、自信を述べてゐる。1887年のことだ。「確固たる基礎が出来た。その上に何物かを建設するであらう」(**"I have got a solid basis, and something shall be reared upon it"**)²と言った意気。文壇的にも十分な位置を得て来た彼。だが皮肉にも、「人生の朝」が出版になった年、1888年には、彼は寂寞の谷に落ちこんだ。永い年月、彼をひきずり廻して来た妻が死んだ。妻の死前から既に、彼は孤独であった。けれども、弱い人間は、重い荷を負はされてこそ、強くなるのだ。永い年月のどろ沼のやうな生活から解放されて、自由を享受し得るのは、強い人間の為し得ることだ。「どうにもならないのに不平をこぼしたとて何にならう。とは言へ、僕のやうな三十面の男が、全くの独りぼっちとは、実にみじめなことだ。欲しいのは家庭的の交際だ。・・・僕我身边は全くの砂漠だ」(**"What is the use of complaining when there is**

¹ *Letters*, p. 193 (May 14, 1887).

² *Letters*, p. 196 (July 8, 1887). [Scott, Walter, 1771-1832].

-- 59 --

no remedy? Yet it seems so miserable that a man at my age should be so utterly companionless. What I want is domestic society... I merely carry a desert with me.)¹と切々たる言葉を、妹に書きおかつてゐる。この砂漠の中で、「どん底」一篇を書きあげたのだ。「妙な事だが、長い生命じゃあるまいと、強く考へさせられてゐる。自分で考へたのぢやなくて、どうもさう信じられるのだ。・・・どうしてかうなったのか解らない。多分全くの孤独であることから来てゐるに相違ない」とは、手紙の文句ではない。彼には他人に向つて、血を吐きさうだとまではとても言へなかつたであらう。——「咳をする度に、若しや血が出はしまいかと、必ず指を舌につけてみてゐる。病的——か知らん? こんな予感が、今の精神的道徳的生活からは、もっともやむを得ぬことなのだと思つてゐるだけだ」(**"I never cough without putting a finger to my tongue to see if there be a sign of blood. Morbidity — is it? I only know that these forecasts are the most essential feature of my mental and moral life at present."**)²——と、彼はひそかに日記につけてゐたのであった。この不安な生活の中で「どん底」一篇をかきあげて、ロンドンのどん底から脱して、憧憬の地イタリアに旅立ったのは、1888年十月のことである。

¹ *Letters*, p. 211 (March 14, 1888).

² *Letters*, p. 215 (June 3, 1888). この書簡集には日記も折々挿入してある。

-- 60 --

IV. イタリアの旅—— エクセタ定住

1888年十月、彼はイタリアへ旅立った。ゲーテがはじめてイタリアに旅立とうとした時の心境を、わが身にひきくらべている¹のももっともなことである。イタリアの風景画も、イタリアの書物を書いた本さえも、この三年間と言ふものは、じっと眺めても居られず、読んでいることも出来なかったと言ふ。そのギッシングの三年間は、ロンドン陋巷の生活であったのだ。パリにつくや否や、都会生活を呪っている。——「自分は今、人間の生活に関することは、何もかもいやでならない。……そんなことに就いての寒心は、凡てロンドンに置き忘れてきた。海峡を越えれば、自分は純粹の一詩人になったのだ。或いは又、芸術の理想主義的学徒になったと言った方が、適切であらう。」(“ **I experience at present a profound dislike for everything that concerns the life of the people....All my interest in such things I have left behind in London. On crossing the Channel I have become a poet, pure and simple, or perhaps it would be better to say an idealist student of art.**”)²と、日記に書いている。

—————

¹ Cf. *Letters*, p. 228 (Oct. 17, 1888).

² *Letters*, p. 228 (Oct. 19, 1888).

-- 61 -- イタリアの旅——エクセタ定住

ナポリからローマへ、——そして、フロレンスで年越し、ヴェニスを経て、1889年三月一日ロンドンに帰った。夢に描いていた古跡を眼のあたりに見、僅かの時間をさいて貧苦の間に習い覚えた外国語が実地に生かして、彼の喜びは如何ばかりであったらう。けれども、彼が古典文学から築きあげていた夢が、今日も尚——例へば現実のローマ¹に残存していたわけではない。彼は十九世紀の現実を、ふみしめようと、徒にあがいている。筆をとって家族の人々に旅信²を書きながらも、もどかしがって、案内記から写してしまった方がましだといっている彼の姿。現実眼をつぶって、現実を出来る限り逃避しながら、かこのあらゆる破片までも、集めて蓄へようと夢中である。「自分はもはや、この世の最上のものを知ったのだ。あとはギリシャだけだ。それをすませば、教育の基礎工事は凡て出来上がったのだ。この教育そのものが、私の生涯の事業でな

ければならぬ」³——と十分な満足を得ている。この「芸術の理想的学徒」の「教育」とは、理想を未来の為に築くのではなく、未来の建築の為に教育ではなく、ただ過去の理想を理解すれば足

¹ Cf. *Christmas on the Capitol*. (A. C. Gissing: Selections from the Works of George Gissing, pp. 130-48) と言う一文を、帰英後執筆している。

² Cf. *Letters*, pp. 225-81. 特に pp. 267-72 (Dec. 31, 1888).

³ *Letters*, p. 269:—— “I am no longer ignorant of the best things the world contains. It only now remains for to go to Greece, then I shall have all the ground work of education. The education itself must be the work of my life.”

-- 62 --

GEORGE GISSING

りるのである。理想の方向が反対であると言えよう。

帰英直後に、ヴェニスで着想した「自由の身」(*The Emancipated*)の執筆にかかり、八月に完成している。聡明な美しい娘が、法螺吹きな伊達男と、あはただしく結婚して、幻滅の悲哀をなめると言ふ筋。この一作は、話よりも、彼の旅行の記述を織りこんだ、自然描写にすぐれた所がある。開巻第一章、ナポリの夕陽を叙するあたり、円熟した彼の筆は、読むものに我を忘れさせる。そして、美しく描かれた自然の前で、人間情欲の世界が展開されるのだ。ギッシングには珍しい一脈の皮肉が、そして風刺がこの作を、いささか読みごたへあるものにするだけである。「世に知れられてくれればくるだけ、勿論僕には自由が増すのだ。して、この特権をゆるがせにする気は少しもない」¹と、自由に筆を揮ってはいるが、決して佳作ではない。

八月に仕事がすめば、避暑に出かける。十月になって霜がおりれば旅を思ふ。「どうにも我慢せねばならぬと言ふのでもなくなると、苦しい境遇に処するのは、不思議に実に難しくなって来る。」² 昔は平気だったのも、今ではたまらない、——他所に行けば寒さもさけられる

¹ *Lettters*, p. 288 (Oct. 9, 1889).

² *Lettters*, p. 288 (Oct, 10, 1889).

-- 63 --

のだ。彼は現代ギリシャ語の勉強にとりかかった。それに自分だけが名をなして、周囲のものが昔のままの時、——自分だけは本当に苦しい。けれども、「他の人達には過程の面白さがあるから、やってゆけるのだ。若し自分の生涯が孤

独であるものとするれば、自分は旅に多く暮らさねばならぬ」¹と、ギッシング晩年の流浪を物語る言葉を聞く。校正もすんだ十一月から、ギリシャへ旅立つ。ギリシャを見て彼の所為「教育」は完成していく。三年前には、「ギリシャをみようなどとは、無法な過分の望みだったのに、今此処に居ようとは！」²と彼の喜びは、非常なものである。英後を一語も話さずに暮らすのも、彼には喜び—逃避の喜びであった。紀元前第五世紀のゼノフォン(Xenophon)などが用いた言葉を話しても、大多数はわかってくれのが、彼には嬉しかった。ハイメッタス(Hymettus)の山が、夕陽に色どられる時、アリストファニーズ(Aristopanes, c. 444-c. 380 B.C.)に読み耽り、彼の夢は十分に満たされる。³ 帰途再びナポリを経て、イタリアの春のほころびそめた頃には、金故に帰国しななければならなかった。⁴

¹ *Letters*, p. 290 (Oct. 20, 1889).

² *Letters*, p. 294 (Nov. 15, 1889)——ギリシャ旅信は pp. 291-306.

³ *Letters* (Nov. 29, 1889)——*Sleeping Fires* (1895) の開巻第一章に、かうした心境の見事な描写がある。

⁴ Cf. *Letters*, p. 306 (Jan. 22, 1890).

-- 64 --

金故に、南歌の春にそむいて帰国はしても、もはや以前のやうな境遇ではなかった。「今から十年の後には、世間の豊かな名とのやうに、私も一軒の主になりえるであらう」と言っただけだが、それが英国ではなからうと、ギッシングを知る程の人であったならば、容易に想像出来ることである。「十二年間の絶望的な苦闘から、私は大陸に家を持たねばならぬと確信するに至った。自分には英国の社交界とは折り合っただけぬ。確かにさうだ。」(“Twelve years of hopeless struggle have convinced me that I must look for a home on the Continent. I cannot get on with English Society, the thing is proved.”)¹ 彼の所為「教育」の結果は、英国のみならず到る所に、彼の安佳の地が見出し得なくなるのだ。この逆行理想主義者のか弱い反抗の叫びを、読者はロレンスの強烈な反抗に比較してみるがよい。けれどもロレンスとても、自分の背後に女性なくしては、何をしようとしても無駄だ²と、云っている。まして、弱いギッシングに、どうして孤独が生き抜き得られよう。しかも、創作上では、従来描いてきた下層階級は描き果たしてしまっただけで、下層階級に対する興味もなくなって来て、行きづまらざる得なくなっていたのだ。書いては棄て、数回の改作の後、次に世に出た「当世三文文士街」に着想したのは、1890

¹ *Letters*, pp. 308-9 (March 16, 1890).

² Cf. *The letters of D. H. Lawrence*, p. 93:— “It is hopeless for me to try to do anything without I have a woman at the back of me.”

年十月のことであり、異常な努力で十二月初旬に書き上げている。¹四月にはパリ²に遊んだりして気分を変へ、あらゆる工夫をこらして一作を為した後に来たのは、底知れぬ淋しさであった。「又しても、もはや孤独の生活にたへられなくなりましたから、再婚しようとしていると不意に申し上げて驚いてはくださるな」と、母に告げて³いる。モーリ・ロバーツの言ふ所を信じれば、彼の第二の妻の選択方法は、実に率直である。「僕は何んともたまらなくなったので、外に飛び出して、一番最初に会った女に話しかけた」(“I could stand it no longer, so I rushed out and spoke to the very first woman I came across.”)⁴と言ふのだからお話にならぬ。そして、1891年、二月に結婚した。この女性がどんな女であったか、言ふまでもあるまいし、ギッシングの生活に幸福をもたらしたとは誰しも思ふまい。そして、ギッシングは二人の人の子の父となり、ロンドンを棄ててエクセスに移り住んだとは言へ、冬が来ても海を越えることは出来なかった。

¹ Cf. *Letters*, p. 311.

² この頃彼は種々旅行のプランを考へている。ドイツ旅行のplanに、“just to make myself perfect in the spoken language” (*Letters*, p. 307)と言っているのは、アメリカからの帰途ドイツに学んだといふ傳記者の説を否定する材料にもなると思ふ・

³ *Letters*, p. 311 (Oct. 1890). この書簡の後に “Gissing was not married until February of 1891” と書いてあるが、Morley Roberts は (Cf. *The Private Life of H. M.*, p. 152) 1890年三月二十日に結婚し、その後 Exeter に住んだと書いている。けれども *Letters* に依れば Exeter 居住は 1891年一月のことである。

⁴ Morley Roberts: *The Private Life of Henry Maitland*, p. 140.

僕は此処で、彼が熟達した筆を思う存分揮って、自己の従来 of 生活を描き出した「当世三文文士街」を考察してみよう。クラブ・ストリートとは、文士の群がり住む街区である、「当世」とは、この文士街が、世紀末にさしかかって、時代の激動の浪にもまれる様子を描いたからなのである。1882年代から86年までを描いたものではあるが、今日の日本の文壇に見る傾向が如実に描かれている思ひがする。その頃の英国の文士が屋根裏に追ひやられ、今日の日本の文士は場末へと追ひやられ、純文学は陋巷に弱い叫びをあげているのも似ている所だ。世紀末英国文壇と言へば、ビアズレ (Beardsley, Aubrey Vincent, 1872-98) やワイルド (Wilde, Oscar, 1856-1900) 等の唯美主義のみを思ふ人々は、ギッシングが身をもって体験して描き出したこの一篇を読んで欲しい。

ユール(Yule)と言ふ家に三人の兄弟があつた。ジョン(John)、エドモンド(Edmund)、アルフレッド(Alfred)の三人で、ジョンは実業家として成功し、エドモンドは早く死んでしまひ、アルフレッドはクラブ・ストリートの人となつた。エドモンドの遺子にエイミ(Amy)と言ふ娘があつて、新進作家エドウィン・リアドン(Edwin Readon)の妻となる。そして我々は、ユール家の知人でありリアドンの友人でもあるジャスパー・ミルヴァン(Jasper Milvain)と言ふ男を見出す。この男が時代の先頭に立つ人間なのだ。「僕は1882年の文人だ。」——「現代文学は一個の

<挿絵>

-- 67 --

トレイト商業である。」¹——文壇は一個の「市場」^{マーケット}であると言ふ。故に彼は文壇に於ける経済力を信じている。知己と機会を獲得するには、金でなければならぬことは百も心得ている。「金があつてこそ友達が持てるのだ」(“To have money is to have friends.”)²と平然として言い切るし、母親のなけなしの金を絞りとりし、結婚は金のある女に限ると言ふ人間である。これに反してリアドンは、ミルヴェンが「現代に於いては何としても、芸術は一個の商業として行はれなければならぬ。現代は商業時代である」³(“Art must be practiced as a trade, at all events in our time. This is the age of trade.”)とでも言はうものなら、「芸術を商業化するとは何事だ!」(“To make a trade of an art!”)⁴と、全身怒りに燃える文人である。「若しも貧にして光栄ある名声を得るのと、富んで賤しむべき人気を得るのと、何れかを選ぶとならならば、私は後者を取る」(“If I had to choose between a glorious reputation with poverty and a contemptible popularity with wealth, I should choose the latter.”)⁵とは言っているが、貧苦にはつき纏われても、名声とは次第に縁遠くなって行く。彼は事務員としての余暇をさいて書きあげた作品が、いささか世にみとめられて、思ひがけなぬ好い妻を獲たのであつた、けれども、エイミも女である。気むずかしい貧乏文士との生活に、

¹ *New Grub Street*, Chap. I: “A Man of His Day.”

² *Ibid.*, Chap III.

^{3, 4, 5} *Ibid.*, Chap IV: “An Author and his Wife.”

-- 68 --

堪えられなくなつて来る。「愛とは、貧にあへば恐れて真先に逃げ出すものである。」¹元来リアドンは、ポケットに書物を入れずには外出の出来ぬ小説家

である。彼の作品は、「社会の一階級を特に取扱ったのでもなし（若しも頭脳のあるなしで、明確に階級を区別しないとすれば）、そして他方色がない」（“They dealt with no particular class of society (unless one makes a distinct class of people who have brains), and they lacked local colour.”)²ものであり、謂はば作者ギッシング自身の作品のようなものだ。大英図書館が彼の本当の家庭であったのだ。そしてミルヴェンなどは、名を聞いただけでも、ぞっとするやうな古典の作者が、彼には日々の食について必要だった。ハロルド・ビフェン(Harold Biffen)と言ふ友があつて、彼も亦貧乏だ。だが、二人の飢えは古典の詩の韻律の中にとけ去る、——「まるで人間の感じる唯一の飢えが、荘重な甘美な韻律で満たされ得る世界に、二人が住んででも居る様に」（“as if they lived in a world where the only hunger known could be satisfied by grand or sweet cadences”）。³彼ビフェンは、貧乏のどん底にいながらも、彼の所謂、「徹底的リアリズム」（“absolute realism”）に立って、一作を完成し、火事の中からその

¹ *New Grub Street*, Chap. XIX:— “Love is one of the first things to be frightened away by poverty.”

² *Ibid.*, Chap V: “The Way Hither.” —ギッシングその人の作の批評にもなる。

³ *Ibid.*, Chap. X.

-- 69--

原稿だけをもつてのがれたが、世に出る筈はない¹。リアドンは遂にエイミにもそむかれ、昔の事務員の生活に独り帰りは帰つても、寂寥にたへかねて、寂しく死んで行く。(文学が人の心を動かす限り、人間が生きてゆかねばならぬ限り、女が世間を棄て去り得ぬ限り、エイミとリアドンとの生活は、真実であらう。)一方ミルヴェンはとんとん拍子に、リアドンのやうに、アルフレッド・ユールのやうに学識はなくとも、財を得、名を得て、世に出て行く。アルフレッド・ユールも亦、「文学」と「教養」²とが同一語であつたジョンソンの時代を羨望する人間である。教養のない女を妻としながら、従順なその妻の発音を訂正せずには居られず、手あたり次第に喰つてかかる狭量な文筆家肌。その娘メアリアン(Marian)は父の為に、うら若き^{いのち}生命を図書館のうすくらやみに費やす、図書館と言ふ大きな蜘蛛の巣にひっかかった不幸な蠅の一匹なのだ。父の為に、様々な本から書きぬきを作っているメアリアンなどが、如何にジャスパ・メルヴェンを恋しようとも、ふり向いてくれる筈はない。

所が、このメアリアンにも、思はぬ富が手に入ることになった。伯父ジョン・ユールが死んで、その遺産が来る。早速にメルヴェンは、メアリアンに求婚する。だが入り

¹ *New Grub Street*, Chap. Xには、Dickens を克服しようとしたギッシングの言葉として屢々 *Letter* から引用した言葉と、殆んど同じ意見がある。

² *Ibid.*, Chap. XXIX.

-- 70 --

さうになった富が、急に消えてなくなる。一方では、リアドンの妻エイミも亦伯父から遺産が来て、しかもこの分は投資してあった所が確実なので、間違ひがない。ミルヴェンは早速に、亡き友リアドンの遺作集を世に出したりして、エイミ¹を手に入れる。かう書いて来たならば、文学を愛し、現に今日でもミルヴェンのやうな男がのさばり過ぎているのを怒っている読者は、ギッシングがさぞかし彼に向って過酷な筆を向けていると思ふであらう。けれども、ギッシングは、ミルヴェンも亦人間であることを知っている。巻末に至って、エイミに告げる喜びには、強ひて獲た幸福の裏にひそむ寂寥がある。エイミの歌う声に、僅かに慰められる人の世の勝利者の淋しさがある。そこにこの一作を価値あらしめる一つの長所²があるのだ。

リアドンも、アルフレッド・ユールも、ピフェンも、作者ギッシングの片影である。更にこの作中には、一人物の口から、作者自身のアメリカの経験が述べられている事は、前に述べた如くである。ギッシングは一人の傍観者として、貧民階級を書いて来たのであったが、この作品に至って、方向をかへて自己の体験を見事に叙述している。体験に根ざした迫真さが、この作品の強みである。ギッ

¹ この一書が時代を描き出したものであることは、1883年に発布になった既婚婦人に財産所有権を認める *Married Woman's Property Act* が Chap. XXVI に取り扱われているのもその一例であらう。

² Cf. E. Legouis & Louis Cazamian: *A History of English Literature*, vol. II, pp. 429-30. (London:Dent, 1927)

-- 71 --

シングもリアドンも、三冊連続小説¹の伝統の下によるめきながらも、短編小説の筆はとれなかった。過渡期に苦しんだギッシングの苦闘がこの作ににじみ出ている。そのみならず、人間が生活する限り、文学青年は濱の真砂の教程にあるであらうから、この作は史的興味、作者の伝記的興味以上に、永く人の心を動かすもののある作で、十分にギッシングの傑作として認め得るものである、けれども、この作には、在来ギッシングの作品に見出した偏見がなく、ミルヴェンですらも寛大に描いたとは言へ、読者を引きつけて、現実を止揚せしめるものがない。現実を直視せしめるのみが文学の最後に任務ではあるまい。リア

ドンの言ふ所の「人生の最上の瞬間」は描き出せていない。――

The best moments of life are those when we contemplate beauty in purely artistic spirit——objectively. I have had such moments in Greece and Italy; times when I was a free spirit, utterly remote from the temptations and harassings of sexual emotion.²

人生の最上の瞬間とは、純粹に芸術的精神状態で、――客觀的に美を静思する時である。ギリシャで、イタリアで、私はそんな瞬間を経験した。その時私は、性的感情の誘惑煩惱から、全く解脱して、自由な精神が持てた。

――
¹ *New Grub Street*, Chap. IV

² *Ibid.*, Chap. XXVII: "The Lonely Man."

-- 72 --

ギッシングも亦、ギリシャ・イタリアでこの境地に到達したではあろうが、常に彼は情熱にひきずられて、情欲のために一生苦しむのだ。そして、彼自身も言っている。――その言葉は、自己の才能の限界を意識したものの弁解も含まれていて面白い。――「自分の思想は、消極的であって、概して、自分の眼に見た通りの人生縮図を、読者に与えるだけにしている。外観は、確かに甚だ愉快なものではない。世の中を薔薇色に見ることは、自分のなし得ぬことだ。人間の向上欲とは、何のことだか意味が解らないし、明快な解釈もなし得ない。――同様に、獣欲とは何であるかさへも解らない。私にとって、世界は単なる現象(外面に現れたものと言ふ、文字通りの意味で)であって、一個の芸術作品を研究するやうに、研究するのである、――とは言へ、世界の起源に就て反省などせず。」*この言葉からも解るやうに、「眼」で見て「頭」でつくりあげるのが、ギッシングの作品であって、決して「心」で書いたもの、全身で書いたものではない。ギッシングその人の豊験に根ざしたこの作品が成功したのも、豊験から出たものであったから、この缺點が多少救はれたのである。そして「頭」で書いて行く傾向は、次第に強くなって行く。

街頭で拾ひあげた第二の妻との生活が、「当世三文文」

――
* *Letters*, p. 318 (April 29, 1891). *New Grub Street* の批評に答へた手紙である。―― "The world is to me mere phenomenon (which literally means that which *appears*) and I study it as I do a work of art—but without reflecting on its origin."

-- 73 --

士街」完成後、エクセタではじまる。貧乏文士の境遇から脱しても、エクセタの自然のふところに抱かれても、彼の家庭生活は「どん底」執筆中と大差なかったらしい。松や樅やその他の木々の生ひ繁る小路、——月桂樹をはじめ常緑樹にかこまれた村々、——低く高く波うつエクス(Exe)の谷間。ギッシングは自然科学者¹とさへなっている。そして、次の大作、「漂泊の生涯」(*Born in Exile*)を書きあげたのが、1891年七月である。²

旅に生きて、旅に死ぬとは、作者ギッシングの生涯を思はせるものがあろう。真にこの作は、作の調子と言ひ素材と言ひ、自叙伝的要素が多い。むしろ前作「当世三文文士街」よりも、この作の主人公から、作者の人品がうかがはれると思ふ。主人公ゴドウィン。ピーク(Godwin Peak)の父は、理想の夢を追って、焦燥煩悶のうちに死ぬ。ゴドウィンとは、かの「政治的正義に就いて」(*Enquiry concerning Political Justice*, 1793)の著者ウィリアム・ゴドウィン(William Godwin, 1756-1836)の名にちなんでつけたのだ。話は1874年、ホワイトロー・コレッジ(Whitelaw College)の賞品授与式からはじまる。父母弟妹に守られたバックランド・ウィリコム(Buckland Warricombe)は僅か

¹ Cf. *Letters*, p, 315 (feb. 17, 1891)

² Cf. A. C. Gissing: *Selections from the Works of George Gissing*, p. 168 : — “*Born in Exile* was begun on the 10th ch, 1891, and finished on the 17th of the same year.”

-- 74 --

ばかりの賞を得たのみで、ブルノ・チルバーズ(Bruno Chilvers)とゴドウィン・ピークとジョン・イヤウエイカー(John Earwaker)の三人が、当日の最高の名誉をわけた。それなのに、ドゴウィン・ピークのみが、その日限り姿を見せなくなった。ゴドウィンは幼時から学業・智力が人一倍すぐれて居た為に、周囲の人々からちやほやされていたので、自然極めて自尊心の強烈な人間になっていた。人からうしろ指をさされることは死ぬよりも嫌な人間だった。その彼の叔父さんが、所もあらうに彼の学校のある町の目ぬきの場所に、喫茶店を出した。どうして二度と学校に出て友達に会へようか。自分自身で、「自然そのものが造った貴族——環境を度外視して人類の上に立つ極めて恵まれたものの一人」(“an aristocrat of nature’s own making—one of the few highly favoured being who, in despite of circumstance, are pinnaled above mankind”)¹であると、思ひこんでしまっていた。その「闘争的自我主義」(“militant egoism”)²は、他面「過度の神経過敏」(“an excess of nervous sensibility”)³を惹き起こして来るのは、極めて自然のことだ。ただ陰鬱な孤独の生活に逃避して行くのみだ。ゴドウィンから見れば、彼は両親をはじめとして、ただ日々

のパンに追はれて知識のない周囲の人々

—————
¹ *Born in Exile*. Vol. I, p. 64. 1892 (London & Edinburgh: Adam & Black, 3 vols.)

^{2, 3} Ibid, vols. I, p. 85—ギッシングの妹の追悼記 (*Letters*, p. 403. Appendix, C) 及び、*Letters*, p. 227 (Oct., 1888) に見るやうに、彼自身をよく物語っている。

-- 75 --

は、一顧の価値も持たない砂礫である。彼は故郷を棄てて旅立った、——「俺は漂泊の世に生まれたのだ、———漂泊の世界に生まれたのだ」(“I was born in exile, —born in exile.”) とさすがに眼をうるませながら。「心の肉親」(“Spiritual Kith and Kin”)¹を求めて、あてどなく旅に出る。

ロンドンに苦闘する事十数年、或る時は下層階級の惨状に憤然として筆をとり、同窓ジャン・イヤウエイカーのつてで、一文を草してみたこともある。彼につきまとふ自我意識が、生活苦とともに激しく抵抗的になれば、その一面には、益々神経がいらだっていく。ともすると競争意識をそそりたてる男性の世界を回避し、女の世界に何とかして入らうとする。「社会的位置の為に、得てからこれ批判しがちな青年の眼にさらされるよりは、女性の間にいる方が、彼は遥かに気楽であった。」²ふと路傍でみかける婦人の後ろ姿を、夢見心地で追ふことさへもあった。「この世に他の望みは何一つない——何にもない!... 僕の

唯一最高の望みは、十分に洗練された婦人を^{めと}娶ることなのだ。正しく言へば、

かうなのだ——僕は一介の平民、だから貴婦人を^{めと}娶らうとするのだ」(“I have no other ambition in life —no other!... My one supreme desire is to marry a perfectly refined woman. Put it in the

—————
¹ *Born in Exile*, vol. I, p. 166

² Ibid., vol. I, p. 247:— “He felt more at ease in female society than under the eye of the young man whose social position inclined them to criticism.”

-- 76 --

correct terms: I am a plebian, and I aim at marrying a lady.”)¹とまで言ひはじめる。彼の所為「貴族性」を満足さしてくれる場所は、この現実社会にはなかった。休暇を利用してエクセタに出かける。ふと行きちがった女性が彼の理想にはふさはしい。しかも何処かに見覚えがある。教会に入っていた

後をつけてみると、その女性は昔見た旧友バックランド・ウィリコムの妹シッドウェル(Sidwell)であった。ウィリコム家をおとづれてみれば、実にやさしくもてなしてくれるし、シッドウェルを中心としたあこがれの女性の世界がある。今の今まで、凡てを棄てて南米の沼澤地に身を埋める決心をしていたのだが、そんなことはさらりとやめてしまふ。南米渡航費は、エクセタ滞在費に変わる。そしてウィリコム家の人々が、ほめそやす今は時めく宗教界の寵児であり彼の旧友でもあるブルノ・チルバースを真似て、心にもなく正教の牧師にならうとする。母以外の人々とは、絶対に交渉をさけて、ひたすらその準備に没頭する。この偽善行為をも、その目指す所が単なる利益ではなく、「伴侶」(“human fellowship”)²を求めることにあるから好いのだと自己弁解をする。

やうやくのことでシッドウェルと二人だけで話せるやうになった。けれども過度に優越感の強い彼には、シッドウェルの心が既に動いてはいても、ただもだへるだけだ。けれども、一度唇がふれてからは、彼ゴドウィンも凡て

¹ *Born in Exile*, vol. I, p. 323.

² *Ibid.*, vol. I, p. 269

-- 77 --

を棄てて、彼女に訴へる。漸く得た彼女の心を抱いて、ゴドウィンが幸福に酔ったのも一瞬時で、運命は逆転していく。嘗て彼が匿名で書いた一論文が、彼女の兄に発見され、正統派の信者であるとは全くの偽りであったことがばれる。追ひつめられた者の強さで、「恥づ可きことをしないでこつこつとやっていたならば、わたしの強い本能を満足することは、この世では全く出来ないのだ。信仰を棄てて、鉄面皮になった時、非常な可能性が僕の眼前に現れたのだ」*と言ひ、その技巧の報いがこれだと、シッドウェルの恋を誇る。此処へ、思ひがけなく遺産が入って来たのでゴドウィンは、今までの卑屈さはどこへやら、高みから物言ふ冷たい調子になって、シッドウェルに求婚する。けれども彼女にべもなく退けられて、どうにも棄てきれぬ我意識を担って、漂然と大陸を流浪する。ヴィーンに病んで、看護するものもなく、死去する。死去の通知を受けとった親友イヤウエイカーはつぶやく、――「死ぬのも流浪の旅でだ！気の毒な奴だ」(“Dead, too, in exile! Poor old fellow!”)と。

作者その人を見るやうなゴドウィン・ピークを描くとき、作者の筆は読者を動かさずにはおかない。強い自我意識の裏にひそむ虚無感を。ゴドウィンは次のやうに言ふ。――「若し僕が、野原で身体に這ひよって来た青蠅をつぶしたとする、するとたちどころに僕は、その運命を羨望する――心底から羨望の念に満たされる。かうも不

* *Born in Exile*, vol. III, p. 161-2.

意に無に変じてしまふとは、何と言ふ恵まれた死滅だらう！」（“If ever I crush a little green fly that crawls upon me in the fields, at once I am felled with envy of its fate — sincerest envy. To have passed so suddenly from being into nothingness —

how blessed an extinction!”）¹ 読者の軽蔑をさそふ程に、ゴドウィンの自我意識を描き出しながら、他面その弱さを描いて読者の心にくひこんで行く。ギッシングの数少ない友人の一人、ハドスン(Hudson, W. H., 1846-1922)は、この作をギッシングの最上の作となし、「ヘンリ・ライトクロフトの手記」以上なりとしている。² 「ギッシングの他の作は皆売っちゃったが、最上の作『漂白の生涯』だけはとっておいた」³ と言っているハドスンも亦、ゴドウィン・ピークではあるまいか。ゴドウィンが、若しも知識をつまなかつたならば、かうした苦痛なしに、平安な生活を送り得たと言ふ事を、作者が解くのではない。知識を得なければ、人は人間らしい生活は出来ぬし、知識を獲ても安住の地がない——作者は言ふのだ。知識階級の没落をとくのもない。没落を説くならば、作者の意図には新興の階級がある可き筈だ。ギッシングは、ただ知識を持つ者の入れられぬ社会を、

—————

¹ *Born in Exile*, vol. II, p. 28.

² Cf. W. H. Hudson: *Men, Books and Birds; Letters to a Friend*, June 27, 1918. With notes and introduction by Morley Roberts. (The Traveler's Library. Jonathan Cape. 1928.)

³ Morley Roberts: *W. H. Hudson* と Gissing との交友は、Morley Roberts に依って結ばれたのである。

罵倒するのだ。若しも、社会環境が十分に描かれていて、ゴドウィン・ピークの漂泊が、必然的であるとは思はせるならば、——換言すれば、社会の一階級の一人として描かれているのならば、その作は上乘のものと言へよう。けれども、ゴドウィンと言ふ人間一人は、描き出せてはいても、その他の人物は悪く言へば人形である。ただこの作を救ふのは、全編に流れる情熱であって、確かにギッシングの傑作の一と言へよう。

けれどもこの作のモチーフは、少数の選ばれた人々(ゴドウェン・ピークの謂ふ所の「自然の造った貴族」)に訴へるのみであって、多数には受け入れられないであらう。スウィートンは、何故にゴドウィンが知識社会に入り得なかつたか、何故漂泊しつづけなければならなかつたか、我々には不可解だ¹ と言っている。ギッシングがこの作中で、夏の汽車旅行の伴侶の作者として挙げている

ハーディ (Hardy, Thomas, 1840-1928) が、1895 年には、文字通りに「漂泊の生涯」を送る「逆境のジュード」 (*Jude the obscure*)² を書いている。ジュードの運命の方が、どれだけ切実に我々に迫ることであらう。私は再度、附言しよう、——ギッシングの作は、「眼」で見て「頭」で造りあげたものであると。

¹ Swinnerton: G. Gissing, p.106:— “His continuance in exile its to us inexplicable.”

² Yates が (*G. Gissing* pp. 54-5) この点に関して詳細に論じている。尚、Morely Roberts: *The Private Life of H. M.* (pp. 116-17) には、Gissing の Hardy 観が述べてある。

-- 80 --

六月に「漂泊の生涯」を書きあげたギッシングが、秋になって書いた「デンジル・クウォリア」 (*Denzil Quarrier*) は、大作の後に来る当然の結果で、甚だしく劣っている。結婚するや否や、夫はとらへられて牢獄に入ってしまったと言ふ、リリアン・アレン (*Lillian Allen*) と言ふ女。そして、その女とクウォリアが道ならぬ関係になる。その関係を知った或る男が、何も知らぬクウォリアをそそのかす。クウォリアは女の後をつけて廻る。女が自殺。ただ見る可きはリリアンの心理描写のみであるかも知れない。

次の作「女人異相」 (*The Odd Women*) は七回¹も構想をかへた苦心の作である。けれども、材料に窮して来たのであらう、ただ種々雑多な社会問題を、科学者が標本を提出するやうに列べたものともみられる危険をもった作品である。彼の苦作振りは非常なもので、ロンドンへ移転しようかとまで考へている。² 1892 年の四月から、十月までかかって漸く完成した。

何の考へもないし、蓄財もない父親が、生命保険に入らうと決心し、決心したかと思ふ間に死んでしまふ。そして澤山の娘を後に残す。三人だけが成人する。長女は

¹ *Letters*, p. 327 (July 1, 1982). Diary

² *Letters*, p. 327 (June 19, 1982):— “ I shall not be able to dispense with immediate study of London for very much longer.”

-- 81 --

小間物屋の手助けをして、給金ももらはずに酷使されている内に、肺病で倒れる。次の娘は、¹人目をしのんで酒をのむ癖がついて、遂に湯槽の中で溺死する。しかもそれが無料の公衆浴場なのである。三番目は、好きでもなんでもない男で、全く彼女とは性格の異っている男と結婚して、不幸な生活を送る。かうし

た風に、この小説は問題の提出であって、全体の統一は皆無である。ただ見る可きは、その冷静な描写力であって、一面に於ては「どん底」に比す可きものがある。そして特にこの小説の意図を探せば、女性の解放、性教育などを眼ざした点であらう。若しも、ギッシングが如何に時代諸相を受け入れたかをみようとならば、この作は興味深い。けれども、「当世三文文士街」、「漂泊の生涯」の二大大作以後、彼の力は著しく劣って行く。幾つかの短篇を書いて、模索を続けている。

1982年の歳末の日記²には、家庭の荒涼たる様を述べ、この一年間ただ一作をなしたのみで、物も読まず、古典は勿論手にもしなかったと、病弱な彼が痛ましい言葉を並べている。二人の子供とふしだらな妻に追ひ立てられて、読むものも買ひ得なかったとみても誤りではあるま

¹ Cf. W. T. Young: "George Gissing" (*The Cambridge History of eng. Lit.*, vol. X III, Chap. Xiv, p. 460.)-当時にては於ては新しい客観的描写に成功した例としている。

² *Letters*, p. 331 (Dec. 31, 1892)

-- 82 --

い。その上創作の材料にも欠乏して来る。「私の材料のあるのは、確かにロンドンである。それに一生懸命失った地盤を取りかへさねばならぬ。けれど、勿論、元気はあるぞ、それが必須条件だ」("It is obviously in London that my materials lies, and I must work hard to recover lost ground. But, of course, I keep up courage: that is *sine quâmon*.")¹と、二年間のエクセタ生活の無為に終わったことをなげいている。来る招待状も来る招待状も、勿論断るのだと言っている孤独地獄に落ちこんでいる彼が、ロンドンに移転したとて何が生まれ出ようか。

六月にロンドンのブリックストン(Brixton)街に転居。けれども孤独地獄を田舎から都会にうつただけだ。彼の日記や手紙はあらゆる悲惨な形容詞に満ちている。冬が来ても、身体が弱っても、彼は一步も動けない。都会が彼を押しつぶさなかったのが、不思議な位だ。1894年四月になって完成した「女皇即位六十年祭の年」(*In the Year of Jubilee*)は、自ら「私の長たらしい作」²と呼ぶもの。そして即位六十年祭の年1897年に出すならば、まだしも、時節はづれに出している。尚、興味あることには、この作の説く所が、愛と平和と静寂な家庭生活であって、無自覚な子を生む為に生きているやうな女房

¹ *Letters*, p. 332 (April 11, 1893)

² *Letters*, p. 337 (April 13, 1894). Diary- "In the evening finished my interminable novel." 尚、即位六十年祭に就ては「ヘンリ・ライクロットの

手記」(“Summer, x x”)に面白い感想がある。

-- 83 --

に対する非難であることだ。ナンシ(Nancy)と言ふ娘が、タラント(Tarrant)と言ふ心にくい青年を、熱烈に説きふせて結婚し、母親になった。けれども彼女は丁年に達するまで、この事実をひたかくしにかくしておかなければ、父の遺産が手に入らないのだ。その為には夫婦別居生活をする。男は得々として別居生活の理想的なものを口には説きたてるが、いつか気も心も弱って来る。ナンシは、人妻とは子供と主人の忠実な奴隷たる可きもの、——さうあるやうに自然がするのだとはじめて悟って、理想的な妻になる。とは言へ、この作を読む者には、どうして彼女がさうした心境になるのか、呑みこみかねる書き方である。強ひて、特徴を探すならば、修練の筆致で書きこなしている山の神に尻にしかれている事務員の夫婦生活とか、群集の描写等がないではないが、構造は支離滅裂である。疲れない程に働いて、一家楽しく爐邊で過ごすのが、その頃の作者の天国であったのだ。疲れた作者が、食ふ為に長々と書きつづけたのがこの作だ。

「歩めば歩むほど生活苦は、軽くなるどころか反って、重くなる一方だ。一・二年の将来を晏如として考へ得られたならば、さぞ変わった心持がするだらう」(“The struggle of life gets harder as one goes on, instead of being lightened. It would be a strange sensation to look forward with easy confidence for a year or two.”)*と、しみじみと歎くギッシングは、すでに長い苦闘の生涯を送って来たのだ。

—————
* *Letters*, p. 334(july 12, 1983)

-- 84 --

更に彼は、子をつれて妻をつれて、子供の健康の為に 1894 年六月ロンドンを棄てた。再び彼がロンドンに姿を現はすことはあっても、ただ暫くの滞在であって、彼の住居は二度とロンドンには無かったのだ。そして、クリーヴドン(Clevedon)に止まったのも、僅か六月から八月下旬までのことだ。

クリーヴドン滞在の初夏から晩夏にかけて、心好い中篇「イーブの身代金」(Eve's Ransom)を、「ロンドン絵入新報」(*Illustrated London News*)に掲載している。執筆の時節にふさはしい心好い——だが、それだけの小説である。話はヒリアード(Hilliard)と言ふ三百代言の情痴の世界である。父親からの思ひがけぬ財産分与にあづかったので、さっさと職をやめて、ロンドン、パリと遊び暮す。けれども貰った金と言っても、僅かに四百三十六ポンドである。住み

なれたダッドリ (Dudley) で、ふと見た写真の主^{ぬし}美しい娘の面影を探して廻る。

やっと知り得た宿所にも居ない。下宿の女主人^{おかみ}は、前の下宿人の居所を決して他人に知らせぬのが世の常。その人が支払いがよかったらならば、勿論言ふまいし、支払いが悪けりゃ尚更言はぬ。又やって来られては大変だからと、珍しくもギッシングが軽い筆を動かす。巴里で見付け出したその娘は、ヒリアードの理想とは異ってはいたが、どこか男をひきつける女だ。この娘イーヴは、既婚の男と私通していたのを、ヒリアードが借金までして救ひ出して、婚約する。そこまでで事のおさまるイーヴではなく、ヒリアードを散々

-- 85 --

に翻弄する。やっと英国に連れ帰ったと思ふと、金があつて彼女を遊ばせてくれるナラモア (Narramore) と言ふ男と、再度平気で婚約してしまふ。イーヴの自由な性格を描き出し、奔放なうちにも人間味のある、ギッシングの描いた女性の中の特殊なもので、注目に値する。この一篇の性格をスケッチした物語の最後をなす冬の描写は、彼の筆の円熟さを示すものだ。初期に見る力強さは、次第に見失はれて行くが、永年の修練の筆で書き流して行く今後の作は、作者には心に満たぬものではあらうが、世間に受けたものらしい。肉体的にも疲労して来た彼は、屢々雑誌に筆をとり、軽く短いものを書いて生計を立てている。

-- 86 --

V. エプソム転居——南欧の海辺——流浪の晩年

1894年八月末に、彼は淋しく住居を求めて、ロンドン、ドーキング (Dorking) とさまよひ歩いて、遂にエプソム (Epsom) に格好の家を見出した。そしてその家に住む事二年有余。私は先づ、その間の生活を書き、次にその時間に完成した作品を見よう。

漸く彼も文壇的に認められて来た。1895年六月、ボックスヒル (Boxhill) のメレディスの家で開かれた、「オウマー・カイアムの会」(Omar Khayyám Dinner)¹に招待され、一流の文士の間に伍している。不思議にもその夜の食卓で話したのが、メレディスの公開の席上でする初めての演説であった。共に招かれていたハーディが、指名されて、二十六年前にチャップマン・エンド・ホール社で、メレディスにはじめて会った頃の思ひ出話をする。ギッシングも亦指名されて、「宿無し」出版について厄介になった頃の話をする。メレディスが、” Where is

Mr. Gissing?”²と自ら探して、握手をしてくれたと言ふが、人の中に出慣れぬおちおちしていた彼ギッシングの姿が思はれるではないか。九月には独りでメレディスを訪問

^{1, 2} *Letters*, p. 342 (July 13, 1895). Diary.

-- 87 --

している。¹庭に導かれて、共にそぞろ歩るきながら、しみじみと語ってくれる、自分を認めてくれたこの老作家のもてなしに、非常に喜んでいる。嘗てギッシングが自己の領分を忘れて迷ひ出した時、適切な忠言を与へたメレディスが、小説中に想像力を加味して、読者の得る果物とせよ²と説き聞かせているのは、又更に適切な彼に対する忠言であらう。左の足をひきずりながら、痛々しい姿のメレディスが、自分の青年時代の苦闘を語って聞かせる。「思ひみよ、今彼は休息している、――二度と筆は執らぬであらう」(“Think he will now rest—write no more.”)³とは言うてはいるけれども、メレディスはギッシングの死後更に五年生きていた。ギッシングには、メレディスのやうな晩年の静閑は与へられなかったのだ。かうして知名の人の間に入り得る日が来たし、雑誌社からもどんどん注文をうける身になっては来たが、ギッシングの家庭生活は反対にみじめになって行くばかり。「自分の社会的発展は、個人生活の不幸と窮乏とに、甚しく平行している」(“My public progress is terribly balanced by private misfortunes and miseries.”)⁴と、わびしく言ふ。「家庭生活が目茶目茶だ、召使はまだ見つからぬ。だから、ひとつも仕事が出来ぬ。」(“Time of great domestic misery. No servant heard of yet, and of course

^{1, 2, 3}, *Letters*, p. 343 (Sept. 3, 1895). Diary : — — ” Pleased for imagination in the nobel : ‘must be fruit for the reader to take away.’ ”

⁴ *Letters*, p. 345 (March 3, 1896).

-- 88 --

no work possible.”)¹筆はとつても、それは生活のために書く短いものである。そして二年の歳月が過ぎて、1895年の十二月、「即座に出版出来るやうな作をなさぬこと既に二年。万事を放擲しなければ、更に一作をなすことは永久に出来ないであらう」²と言っている。彼の夢は、アメリカから帰った直後の頃の苦闘を想起していたのであらうか、亡き弟ウィリアムの上に及んでいる。今は既に当年の元気はなく、疲れはてた彼である。夢に浮んだ詩句は、――

“O Rome, my country, city of the soul.”³

「おおローマよ。我が母国、魂の都よ！」

——であっても、彼の現実世界はローマとは別世界である。文字の上ですら「魂の都」をおとづれる暇もなければ、余暇をつくり出せる精力もなくなっていた。

「ああ。せめて一日に半時間でも、ギリシャ語とラテン語に捧げる気力があつたなら！」（“Ah, if I had but the energy to give but half an hour daily to Greek and Latin!”）⁴嘗ては夜半過ぎても、古典を手放したことのなかった彼ではないか。「渦巻」(*The Whirlpool*)を完成した1896年の暮、彼は肺を病んでいた。翌年二月以降南デヴォン(South Devon)

¹ *Letters*, p. 342 (Aug. 28, 1895).

² *Letters*, p. 345 (Dec. 30, 1895).

³ Byron 作 *Childe Harold's Pilgrimage*(1809-18)の中の句(Canto. IV, st. 78)である。Cf. *Letters*, p. 344(Dec. 25, 1895). Diary.

⁴ *Letters*, p. 399 (June 29, 1896). Diary.

-- 89 --

に病を養ふこと三箇月。けれども、彼の手は書物から離れなかった。次から次へと読みつづけるのも、年来の宿願である歴史小説を書く為であった。ローマの歴史を読み耽っていた彼が、遂に生前にはその望みを達せず、「ヴェラニルダ」を未完に残して行ったことを知る時、涙なき者は、智を求むる者の友ではない。この読書の間に、おそらく軽い心持で筆をとったのであらう、七月に「都の行商人」(*The Town Traveller*)——ガモン(Gammon)と言ふ何の屈託もない行商人が、ポリ・スパークス(Polly Sparks)と言ふはねっかへりのお尻をおっかけて、おっかけそこなって閉口する話を書いている。珍しくも作者は、面白いお話を軽く書いている。——とは言へ、知識のある人にとって面白い話である。作者が横向きながら、せせら笑って下層社会を書いているのだから、知識のない社会に受ける筈がない。古典を読みながら、かうした作を書かなければならなかった作者の心境を思う可きだ。しかも、書きたいと思ひ、準備をすすめていた作には手もつけずに、南をさして、九月には海を渡っている。

作者を南欧の旅に見送っておいて、我々は暫くエプソム住居の間に書いた三作を取りあげてみよう。1895年には、二つの短い作をしている。「下宿人」(*The Paying Guest*)と、「埋み火」(*Sleeping Fires*)の二巻。共に、従来 of 彼の作にみた我意識が表面に出ず、静かに凡てを受け

-- 90 --

入れて行く淡い情緒に満ちた物語である。二巻共、短篇として十分な構成をなしているものではなく、むしろ、挿話(episode)¹である。

「下宿人」²は愉快的な物語ではないし、最後までひきずっては行くが、あとに

にがみの残る濃いコーヒーのやうなものである。ロンドンの郊外に家を持った余り豊かでない若い夫婦が、下宿をはじめ。家を逃げ出して来た娘が、部屋を借りた。彼女の父は、彼女と同年代の娘を持っている夫人を後妻に貰った。この母のつれ子と、同じ男を恋し、しかもその恋人は気の向くままに、一方を愛したかと思ふと、又他に移る。遂にこの勝気な娘は家を飛び出して、部屋を借りるやうになったのだ。若い夫婦の家庭が乱れる。それに彼女を恋ひ慕ふかなりの年代の男があらはれて、彼女が部屋を借りていた家を焼いてしまった。が、終に目出度く二人が結婚する。

「埋み火」³は、軽い物語で、それこそ春寒の日に埋み火をかき立てて読むにはふさわしいものだ。世を捨てて静かにギリシャの古都に抱かれて暮らしていた男が、思ひがけなく、昔の同窓で昔と変らぬ好学な友に、所もアセンズの古跡でめぐり合ふ。その友がつれていた若者が、どう

—————

¹ Cf. Swinnerton: *G. Gissing*, p. 130—この点を彼の短編小説のみならず、全体の作の欠点として指摘している。

^{2,3} Cf. 市河三喜(編): *The Private Papers of Henry Ryecroft*. p. vi (研究社: 英文学叢書):—「Gissingの長篇は大略二十万語から五十万語前後で成立して居り、短篇は八千から一万語前後であるが、この短篇は三万語前後である。」

-- 91 --

も見覚えがある。それもその筈、その昔、自分がふとした事から関係した女との子—我子なのだ。病弱の若者は、父を父として思ひ浮べ得ぬうちに、いたづらに多くの理想を抱いて死んで行く。死んでいた筈の情熱が、かきたてられて行く恋の物語。それが精妙な筆致で描かれたギリシャで展開される。¹

「渦巻」は、彼のあがき苦しんだ跡の見える失敗の作である。「頭」だけでは小説のかけない例証になる作だ。アルマ・ロルフ(Alma Rolf)の父は、ボロ会社製造を事とする出来損じの実業家で、遂には自殺して果てる。アルマは見栄^{みえ}のために音楽を習ひ、お定まりのつんとすました娘で、ちやほやされたくてたまらない女である。この娘を追ひかける百万長者の恐る可き好色漢や、純情をのみ捧げる作曲家だとかが、種々な人物が解剖して陳列される。けれども、社会の力強い渦巻ではなくて泥水を掻き廻していると言ふスウィナーストンの批評²は適切である。

さて、作者ギッシングの旅の後を追ってみよう。

ミラノからシエナへ、——そしてそこに彼の足が、一箇月余止まる。この海抜千呎の地で、秋の日をあびて病を養ったのであらうか。十一月だと言ふのに、窓をから

¹ Swinnerton. *G. Gissing*, p. 135:— “It is characteristic Gissing, and has passages of good quality, which show how lightly Gissing could design and execute when he had a subject fit to his hand”)

² Ibid., p. 115

-- 92 --

りとあけて、眼下の町を鈴をならして行く山羊の鳴き声に聞き入り、秋空にそり立つ寺院の塔に見入っている彼の心は、決して病の保養にだけ向いていたのではない。一日に二千語づつ彼は筆を動かしていた。それも創作ではない。彼の創作の筆はもっと速い。彼はディッケンズ論を書いていたのだ。ディッケンズの生命が不朽のものである限り、——誰がディッケンズの亡びる日を考へようか、——この彼の批評も亡びないであらう。けれども、彼は、この風光明媚の地に来てまで、筆をとらねばならぬ不幸をかこっている。¹ともあれ、チェスタートン(Chesterton, G. K 1874—)がディッケンズ論²を書く時にギッシングに向かって、「天才の人」(“a man of genius”)²と呼んで敬意を表し、ディッケンズを論ずるほどの人か皆引用するこの書を書いている間に、テニス論が書いてみたくなったと言ふ³のを聞いて、誰しも残念に思ふであらう。

十二月になれば、「イオニアの海辺」(*By the Ionian Sea*)を着想し、「ヴェラニルダ」の舞台をしらべ、彼の旅はローマへとつづく。1989年四月、ローマへ立って、帰途ドイツに旧友ベルツを訪問して、帰国する。三度訪問したローマで彼は告げる。——「私は経験上、胸の弱い人は、イタリアに来る可きでない事を知った。若く強健な人には、イタリアは素晴らしい国だ。病人には何の慰安も

^{1, 3} *Letters*, p. 354 (ocr. 12 1897)

² 寺西武夫氏の註が英文学叢書にある。Cf. p. 4.

-- 93 --

なければ、多くの危険があるばかりだ。キーツをローマに送ったのは、この上もない馬鹿な事だった。」*——寂しい言葉ではないか。魂の故国からも、病弱の彼は、追放されたのだ。

帰来後、彼は、ドーキングに家を持った。そして直ちに筆をとったのが「生命の冠」(*The Crown of Life*)である。無理に笑った、誇張の多い作である。青春の心をかきたてた女性を、或る男が、その女が他の男と婚約していてもなんでも、つきまとして、遂に結婚すると言ふ、型にはまった恋物語。漸く一作をなしたかと思へば、流行感冒から肋膜炎になり、病全快するや、英国を見すてている。そして巴里へ。1899年の夏には、フランスの各地方やスイスを旅し

て、健康の恢復につとめている。かうして、遂に死ぬまで、殆ど転々をして流れ歩き、故国の土をふむことも稀であった。

1899年の暮から、翌年五月までのパリ在住中に、彼の筆は動かず、彼の健康は思はしくなく、しかも、母国英国を憤然として罵倒しつづけている。彼は言ふ、——「自分の争うのは、英国に対してではなく、英国文明を変化し、恐らくは破壊しようと全力をあげて努めている人々と争うのである」(“My quarrel is not with *England*, but

* Letters, p. 364 (Jun. 23, 1898). — Keats はローマで客死。 Cf. Letters. P. 160 (July 27, 1885): — “Of Keats read every thing. To like Keats is a test of fitness for understanding poetry, just as to like Shakespeare is a test as general mental capacity.”

-- 94 --

with the people who are doing their best to change, and perhaps destroy that English civilization.”)¹と。南阿戦争の非道に怒った彼は、英国文明の特殊性を強調して、当代英国国民の無謀をなげいているのだ。「物はろくに読まず、それにぶちこはしたいやうな創作だ。だが、金にはひどくつまっている」(“Reading very little; my novel is poor stuff, I wish I could afford to destroy it; but I am sore pressed for money.”)²と言った境地にあって、胸を痛めた自分には、二度と見られぬイオニアの海辺の思ひ出を筆にのせたのが、「イオニアの海辺」である。

この一篇のスケッチから、人はあらゆる南歌で感じ得るものを感じるであらうと、言ひ切っても誤りではなからう。しかも、見事に極度に芸術化されたものである。南歌の地を踏んだ事のない僕は、冬が来て部屋に閉ぢこめられる毎に、幾度この書を手にしたことであらう。何れの章を最もすぐれたものとも思へない。³読みつづけければ時を忘れる。所を忘れる。

I shall look upon the Ionian Sea, not merely from a train or a steamboat as before, but at long leisure.... Every man has his intellectual desire: mine is to escape life as I know it and dream myself into that old world

¹ Letters, p. 369 (May 21, 1900).

² Letters, p. 368 (Feb. 14, 1900).

³ Chap. IX: “The Mount of Refuge.” を最上のものとしてあげる人もある。 Cf. W. T. Young: “George Gissing” (*The Cambridge History of Eng. Lit.*, vol. X III, Chap. xiv, p. 461).

which was the imaginative delight of my boyhood. The names of Greece and Italy draw me no others; they make me young again, and restore the keen impressions of that time when every new page of Greek or Latin was a new perception of things beautiful. The world of the Greeks and Romans is my land of romance; a quotation in either language thrills me strangely, and there are passages of Greek and Latin verse which I cannot read without dimming of the eyes, which I cannot repeat aloud because my voice fails me.*

私はイオニア海を、以前のやうに、汽車や汽船から見のではなくて、ゆっくりと眺めるであらう。・・・人は誰でも、智的欲求を持っている。私の望みは、私の豊饒した人生を逃避し、子供の頃の嬉しい空想の世界であった世界を、我を忘れて夢見ることにある。ギリシャ・イタリアの事物の名は、何にもまして私を引きつける。私を若やがせ、ギリシャ・イタリアの文学の項^{ごと}毎が新たな美の感覚をもたらしたあの頃の強い印象をもたらしてくれる。ギリシャ・ローマ人の世界が、私のロマンスの地なのだ。その言葉を引用すると、不思議に身内^{みうち}がおののく。そして読めば必ず眼がうるみ、声がつまって繰り返せぬギリシャ・ラテンの詩句がある。

ロマンスの国を、病める彼には再び眼のあたりに見ることは出来ず、文字に描いてその世界を再現する歴史小説

* *By the Ionian Sea*, Chap. I, p.13 (London: Chapman & Hall, 1917.)

の筆も生活に追はれて執ることが出来ない。

1900年五月、パリを棄ててサン・オノーレ・レ・バン(St. Honorè les Bains)に居を移した。その地の気候が適して、「当世三文文士街」以上の作だと思ふと言って書いた¹のが、「我が友、大風呂敷」(*Our Friend the Charlatan*)である。作者の意図する所が新時代の軽薄に向けた風刺²であって、作者の理想が高かったにしても、既に作者自身の心境が此処になく、ただ作り上げで行ったものとしか思はれない。個々の人物は解剖し出されてはいても、心境に根ざさぬこの作品の構成は、伝統的な型にはまっている。しやれ者大風呂敷のモダンボーイたるダイス・ラシュマー(Dyce Lashmar)をおだてあげて議員にするオグラム

(Ogram)夫人。大風呂敷のこの男を面と向かってこっぴどくやつける夫人の秘書
コンスタンス(Constance)。どの人物も不自然だ。どこに行っても振られ通した
ラシュマーが、おしゃべり者のウールスタン夫人(Mrs. Woolstan)と、金目あて
に結婚してみたら、夫人の財産は既になし。かうした上つ調子な地につかぬ結
果になるのも、当然である。作者は当時の新聞すら手にしていないのだから。
いつまでもつづきさうな戦時気分新聞などは手にとるのも嫌であったらしい
彼に、新時代が描ける筈がない

¹ Cf. *Letters*, p. 370 (May 30, 1900). Diary:— “Better work, I think, than I have done since *New Grub Street*.”

² この作の最初の題名は The Coming Man.

-- 97 --

「今後数年間絶えず戦争があるであらう。新聞をよむと気がめいる。出来る限り古代の詩人に気を向けている」(“No doubt there will be continuous warfare for many a long year to come. It sickens me to read the newspapers: I turn as much as possible to the old poets.”)¹とは、1900年7月の手紙に見る言葉である。そして秋十月には、「ヘンリ・ライクフトの手記」を着想している。「イオニアの海辺」の好評に乗ったのだとは言へ、行く可き所へ来たのだ。私は筆を改めて、この作を検討しよう。

この作は既にわが国に於いて広くよまれ、翻訳も数種あるし、幾度か教場の白墨にもよごれたものであって、今更私がかれこれ説くまでもないであらう。それに、藤野滋氏の立派な訳があり、市河博士の充分な註があるのだから、申し分ない。私はその創作の過程をいささか詳細に、そして簡単にその思想を解剖してみよう。

1900年十月の手紙²に、この書物の最初のプランが書いてある。それに依って記してみれば、次のやうな題名である。――

AN AUTHOR ATGRASS.

Extracts from the Private Papers

Of

HENRY RYECROFT.

Edited by George Gissing.

¹ *Letters*, p. 371 (July 8, 1900).

² *Letters*, P. 372 (Oct. 24, 1900).

-- 98 --

——そして、その内容の説明は、殆ど現在の「手記」に「序」としてついているものと、同じ意味のものである。五十歳の老クラブ・ストリートの労作者の手記からなること、年三百ポンドの収入のある財産を手に入れたこと、そして晩年を幸福に過すこと、——「妙な雑筆集」(“a strange miscellany”)ではあるが、在来の私の作中、最上のものとなるであらうと附言している。1901年の秋には、非常な推敲と増補が加へられ、1902年五月頃¹から「隔週評論」誌上に連載され、十一月には第三部²が出ている。一冊になって出たのは1903年初頭のことである。創作の形式を棄てて随筆の形に抛りたかったことは、五年以上前の書簡³からも立証される。この事実は、彼の小説の特質を説明するものでもある。部分的問題にすぐれていて、全体の構成が十分に引きしまっていないのが、彼の小説の通有の欠点ではあるまいか。環境さへ許したならば、随筆の筆を振った方がはるかによかったであらうと思はれる個所が、1892年頃以後の小説には屢々ある。このギッシングが「殆ど十年の間考へて来て、実際執筆に二年以上費した」(“It has grown in my mind for

¹ Letters, p. 384 (April 16, 1902):— “I believe the first part of The Author at Grass will appear in the May Fortnightly.”

² Letters, p. 390 (Nov. 1, 1902). Diary:— “Third part of Author at Grass appears in Fortnightly. Have corrected all proofs of the volume for constable, to appear carly in the year”

³ Letters, p. 192 (April, 1887):— “I am thinking over a mixed volume of critical essay and social musings which I hope to write some day. It has long been in my mind.”

-- 99 --

nearly ten years, and more than two years have gone to the actual writing.”)¹と言ふこの作が、相当の成功をおさめたのは自然なことであらう。出版後二ヶ月²ならずして三版を出し、見知らぬ人々からの手紙を受け取ること五十通。ロンドンの社交界では話題になっていると伝へ聞いて、ギッシングの言ったことは彼自身を物語っている。——曰く「金にしてどうなったか考へて見よ！勿論、文筆の事を少しも知らぬ人々は、私がしこたま金を獲ていると思ふだらう。」(“See the result in cash! Of course people who think nothing of such matters think I am drawing large sums of money.”)³金！金！と言ふ彼ギッシングと、ヘンリ・ライクロフトその人とは、およそ遠い世界に住んでいる。

その題辞に“Hoc erat in voties”⁴(これ我が祈願の一なりき)——と言っているやうに、この作はヘンリ・ライクロフトなる一人物を創り出して、その影からギッシングが、自分が理想とする生活を描き出したものである。けれども、ヘンリ・ライクロフトなる一個性の研究を眼ざして、秩序を立てて精密に書い

たわけではなく、胸中に浮かんで来る理想を、ただ漠然とギッシングが、次か
—————

¹ *Letters*, p. 384 (April 16, 1902). Cf. A. C. Gissing: *Selections from the works of G. Gissing*, p. 267—1900年の9月1日から10月23日迄の間で書いたと言っているのは、第一回の草稿を意味しているのもであって、確かにその後色々訂正しているものとみられる。

² この作の反響に就ては、*Letters*, pp. 392-3 を見よ。

³ *Letters*, p. 393 (March 25, 1903).

⁴ Horace: *Satires*, II, vi.

-- 100 --

ら次へと書いたものと見たい。順次に浮かんで来た理想生活の幻影を、その各々にふさはしく春・夏・秋・冬に分けて四部としたのであらう。若しギッシングの生涯を辿って、少しでもその思想傾向を注視して来た人であるならば、次のやうな言葉に出会った時、立止まって考へることであらう。——

Foolishly arrogant as I was, I used to judge the worth of a person by his intellectual power and attainment. I could see no good where there was no logic, no charm where there was no learning. Now I think that one has to distinguish between two forms of intelligence, that of the brain, and that of the heart, and I have come to regard the second by far the more important. *

愚かにも傲慢であつたので、自分は以前には智力と学識とに依つて、人の価値を判断するのが常であつた。自分は論理のない所に何等の善を、学問のない所に何等の美をも見る事が出来なかつた。今では自分は、人は智慧の二つの形式、即ち脳力のそれと、心情のそれとを識別しなければならぬと思ふ。そして自分は後者の方を、遥かに重大だと考へるやうになつた。

更に読み進んで行くと、「夏」に於いて宿屋について論ずる際に、英国の下層階級の美を認めている。勿論、個人として美しい人間がどん底の社会にもいることを、彼は描いては来た。けれども、「群衆を理解するためには、
—————

* *The Private Papers of H Ryecroft*, "Spring," XVI

-- 101 --

その堪へがたい言動の奥へ入つて、非常に美しい市民的性質は、殆ど全く厭はしい個人的態度と調和し得るものだといふ事を学び知らなくてはならない」¹

とまでは、群衆に就いてギッシングは言ひ切つてはいなかった。さうして、心情の智慧を知り、群衆のうちにある「美しい市民的性質」(very fine civic qualities)を認めたならば、当然「自分は民衆の味方ではない」(“I am no friend of the people”)²とは言ひ得ないであらうし、「自分の体内の一切の本能は非民主的である。」(“Every instinct of my being is anti-democratic.”)³と言っているのは、何故であらうか。民衆の中に入って下層階級の為に戦ふ事は、自分の天職ではないのだと言ふ。「自分にあつては、その様な事は自然の導く手から離れて踏迷ふことになる。自分は平和と黙想の生活のために造られた人間であることを知っている、少なくともそれだけの事は知っている」(“In me it would be to err from Nature’s guidance. I know, if I know anything, that I am made for the life of tranquility and meditation.”)⁴と、自己の生活の限度を示している。と同時に自己の優越の主張でもあり得ることは、全編の態度から容易に推察出来ることであらう。或る点か

¹ *The Private Papers of H. Ryecroft*, “Summer,” XVIII:- “To understand, multitude, you must get below its insufferable manners, and learn that very fine civic qualities can consist with a personal bearing almost wholly repellent.”

^{2, 3} *Ibid.*, “Spring,” XVI.

⁴ *The Private papers of H. Ryecroft*, “Spring,” IV

-- 102 --

ら解釈すれば、適当な言葉であると言つて引用しているジョンソンの言葉、——「学問有る者と無学な者との間には、生きた人間と死んだ人間ほどに大きな相違がある。」(“There is as much difference between a lettered and unlettered man as between the living and the dead.”)¹——と言ふ差別的考へを、すて切つてはいない。ヘンリ・ライクロフトの態度は(そしてそれは又作者の態度でもあらう)、自己の生活範囲を限定し、あくまでもその範囲内に於いて生きようとする努力である。それ故に、自己表現の際には屡々強い否定を使用している。“I am no friend of the people,” “I am no cosmopolite,” “I am no botanist” ——と言つた具合に、「・・・ではない」と限定する。そして自己の範囲は、静思し黙想する生活なりとし、その生活の保証を社会から受けるのは当然であつて、自分はその特権を享受し得る特権階級²に属する人間であると言ふのだ。

けれども、かかる生活範囲厳守の態度が完全に保てるならば、それは人間以上のものか以下のものである。クリスマスの夜、静かに書を開いて、静思黙想しつつ時を過さうとしても、耳に入る会堂の鐘の音が、彼の心をかき乱してならぬ。「暫く現世から^{おもて}面を^{そむ}背けて、故人となつた人達と交わるのは敬虔な行為

である。そして誰が、幸福な孤独の中に降誕祭を過す者程に、その気分十分に
浸る

¹ Ibid., “Summer,” XIX

² *The Private Papers of H. Ryecroft*, “Spring,” IV

-- 103 --

事が出来ようぞ。自分は今夜は、よし出来ても、楽しい集^{つど}ひには加わりたくない。それよりも、久しく黙っていた人々の声を聞き、そして自分だけが思ひ出すことの出来る幸福な思ひ出に独り微笑した方がましである¹と言ふが、その微笑の裡に、なつかしい涙のこもっているのが見えるではなか。そして彼は、生命ある者の声を聞くまいと、耳を塞いでいる。「心して自分はこの降誕祭の孤独を守っている。」(“Jealously I guard my Christmas solitude.”)²——ここににじみ出ている感情が、この一巻を生かすのである。そしてこの心にくい純情が湧き出したのも、作者その人が、少なくとも「頭」だけででも、「心情の智慧」を把握し得た所から来ているのだ。

安倍能成は、藤野氏のこと譚³に序を書き、「私は日が暖かだけれどもほこり風が頻に吹く様な春の日に、障子を締めて書齋にこもってこの書物を読んで見たい。又冬の夜の静かに更けて行く時に、『埋み火かきたてる』様な心持で、この書物に対しても見たい。この書物は私には、ちょうど現代西洋の『徒然草』か『方丈記』の様な気がする」と言って居られるが、現代日本の「徒然草」、「方丈記」があるであらうか。それは、ギッシングのやうな、

^{1, 2} *The Private Papers of H. Ryecroft*, “Winter,” XIX:— “I would not now, if I might, be one of a joyous company; it is better to hear the long-silent voices, and to smile at happy things which I alone can remember.”

³ 「ヘンリ・ライクロフトの手記」よりの引用文は、同氏の譚による。謹んで尊敬と感謝の意を附記する。

--104 --

「知識」の殉教者に依ってこそ書き得るものである。一巻の書物より外、何の慰みもなくなるまで、追ひつめられても尚、知識に対する純情を失はずに居られる人間が、現代日本にあらうか。

In omnibus requiem queasivi, et nasquam inveni nisi in angules cum libro.¹

あらゆるものにわれ^い憩ひを求めしかども、一卷の書を携えて室の一隅に退くより外、何処にもそを見出し得ざりき。

——と言ふ「キリストのまねび」(*Imitatio Christi*)の一句を、ライクロフトは、自分より深く心に銘記しているものがあろうかと言ふ。ギッシングは人生に於いてこの^い憩ひさへも、容易に与へられぬ程、追ひつめられつづけていたのだ。僅かにその理想を描き得る閑暇が与へられたのが、死前の^つ束の間である。死前一瞬の清閑を得て、暫くに理想の断片をつみかさねた得たのが、この一卷である。

ライクロフトは、「序」によれば「もう一冊、単に彼自身を満足させる為の書物」を書きたかったらしい。ギッシング自身は、「自分の心のそこからの考へを、私は『ヘンリ・ライクロフト』で吐露してはいない」²と言っている

———
¹ *The Private Papers of. H ryecroft,*” Spring,” XVII. *Imitatio Christi* はトマス・ア・ケンピス (Thomas à Kempis, 1380-1471) の著。

² *Letters,* p. 398 (Appendix A) ” I did not put my innermost thought into *Henry Ryecroft.* ”

-- 105 --

る。ギッシングは、全心を吐露した作品を、生前に残し得たであらうか。彼の晩年の流浪の後を辿ってみよう。

1900年五月サン・オノレ・レ・バンに滞在後「我が友、大風呂敷」を完成以来、彼の脳中には、二つの創作があつたらしい。一つは「ヘンリ・ライクロフトの手記」であり、他は「ヴェラニルダ」である。けれども「ヴェラニルダ」は歴史小説であり、彼には全然新しい分野である。匿名で出さうか——匿名で出して売れるであらうか。売れさうもない。——「金が勿論、何よりも先きに必要なのだ。」(“Money is, of course, my first need.”) ——と、彼は躊躇している。1901年に入ってパリに移って以後も、彼の関心は、この作に向けられている。そして、「私が読者に送った作の中で、はじめての真に忠実な作品となるであらう。数年の準備の上で表現したものであり、迫られて書いたものではないから」(“It will be the first really honest piece of work I have offered to my readers, for it represents the preparatory labour of years, and is written without pressure.”)²と言ひ、この夏までには完成すると言っている。歴史の世界に於いてこそ、彼は魂をさらけ出せるのだ。批判的の仕事に於て、

はじめて凡てを棄ててディッケンズの内心にくぐり入って見事な評論を書いた。それと同じやうに、歴史の世界に於いてはじめて、自

¹ *Letters*, p. 373 (Dec. 27, 1900).

² *Letters*, p. 375 (Feb. 17, 1901).

-- 106 --

我が全く棄て切れたのである。けれども、彼の病はつづいて、六月にはサフォーク (Suffolk) のサナトリウムで病を養っている。北に行きたい彼の望みもかなへられず、オートン (Autun) からアルカション (Arcahon) へと、転々と居を移している。為しえたことは、「ヘンリ・ライクロフトの手記」の推敲と、ディッケンズに関する仕事である。特に彼が愛読していた大きなフォースター (Forster, John, 1812-76) の *Life of Charles Dickens* (1872-74)¹ を、巧みに縮小した事は、たとへギッシングにとっては、閑暇の片手間仕事ではあっても、どれ程有益なことであらう。

「実際私は、文学の世界で苦闘をはじめた青年に、このフォースターの書より以上に、直接有益な書物はないと言ふ可きである」² と言っているこの書に、自己の解釈を加味して縮小した、面白い書物である。

更に彼の流浪はつづいて、1902年四月にサン・ジュアン・デュルズ (St. Jean de Luz) に移っている。「一年かそこいら、バスク人の国に行くことに決めた」³ とは、言っているが、遂にこのピレネー (Pyrenees) 山脈の麓、ガスコーニイ (Gascony) 湾のほとりに眠ることにならうとは！けれども彼は故国を思はぬではなかった。この流浪

¹ 色々な版があるが、私は Chapman and Hall. (1903) 版をすすめる。

² George Gissing: *Charles Dickens; A Critical Study*, Chap. IV, — “I should say, indeed, that there exists no book more immediately helpful to a young man beginning his struggle in the world of letters than this of Forster’s.”

³ *Letters*, p. 383 (April 14, 1902.) Diary: — “Decided that we go for a year or so to the *pays Basque*,”

-- 107 --

の生活に堪へられなかったのだ。病むが故に筆をとる気力もなく、思ふ存分に本の読める図書館もない。しかも、彼の自信は強い。ただ数年の生命を与へよ！——と言ふ彼の言葉が、どうして、心動かさずに聞き得よう。¹ 彼が死前一年に、心の底から吐いた言葉を記さう。——「昔は自分の晩年を、あらゆる貧苦で思ひ描くのが常であった。けれども、夢にも思はなかったのは、健康を損じたが為に、物が書けなくなることであった。」 (“In the days gone by, I used to

imagine for my later life all the evils of poverty: what I never foresaw was inability to write through failure of health.”)²彼は歴史小説の筆を、1901年四月以来殆ど進めず、世間受けのする作を、ぼつりぼつりと書いている。「一日にたった一項だ。昔を思ってみるがいい、十項も書いた事があるのぢやないか。」(“Do only one page a day. Think of the old days, when I have done as many as ten!”)³死の年1903年の初頭に完成した「ウィル・ウォーバートン」(*Will Waburton*)⁴は、かるくあっさりと描き出した世間話である。自分の金も母親の金も、友達の失策の為にすっかりなくしてしまっていて、乾物屋を開業すると言った、ありふれた話を、練達の筆であっさりと書いたものだ。この作の筆者が、病苦をかこち

¹ Cf. *Letters*, p. 384 (April 16, 1902)

² *Letters*, p. 390 (Dec. 24, 1902)

³ *Letters*, p. (Nov. 1, 1902)

⁴ 死後、1905年出版

-- 108 --

ながら、動かぬ筆でやっと思きあげ、書きたいものも書かずにいたのだとは、誰に想像が出来ようぞ。1903年三月になって、「ライクロフト」の想像外の成功¹に元気づき、健康も快復して来たので、ためらっていた歴史小説「ヴェルニルダ」の筆を執りはじめた。けれども、死ぬ一ヶ月前、1903年十一月の妹にあてた書簡²を、此処に引用して、僕の悲しみを記さう。――

I am glad to tell you that I have done about two-thirds of *Veranilda*; when it will be finished, I dare not say, for, with the beginning of winter have come the usual troubles—illness and discomgort—and I have just lost a week. It *might* be finished before the end of January. I am just now in the monastery of St. Benedict, and very difficult it is to make such a man talk.²

「ヴェルニルダ」の三分の二を終わつたと、お知らせ出来るのは愉快です。何時終わるか、はっきり言へません。冬が来ると同時に、いつものやうに、病気を沈んだ心持に悩まされて――一週間臺なしにしてしまった。出来れば、正月の終わりまでに完成したいと思っている。今、聖ベネディクトの僧院を書いているが、かうした僧侶に会話をさせるのは、実にむずかしいものです。

「ヴェルニルダ」は、紀元前六世紀のローマ帝国を背景

¹ CF. *Letters*, p. 392 (March 21, 1903):—” Of course the success of *Ryecroft* helps to keep me cheerful and hopeful!”

² *Letters*, p. 395 (Nov. 11, 1903). この手紙が、今日我々の眼に入る最後のものである。

-- 109 --

として描いたもの。素材は既に早く「宿なし」の中の人物が描かうとしたものと同じであることから見ても、この作がどれ程長く、ギッシングの脳中にあっただかが解るであらう。ジュリアン・カスティは言ふ、——「ヴァーヂルはローマ建国を書きましたが、ローマの崩壊も亦、偉大な題目ですね。それは数年の準備と、更に執筆の為に数年を要するでせう。アラリックのローマ包圍と占領——どうでせうか」*と、ウェイマークに相談するのであった。作中人物にその理想を語らせて、僅かに慰めていたその作が未完成で残ってしまった。けれども、古代彫刻が破損の故にとまで思はれる程、一種の特殊な美しさを今に示しているやうに、未完なるが故と言ひたい美しさがある。この作がギッシングの最後の光りであるやうに、時代をローマ帝国に衰亡の兆しが著しくなった時に取り、異民族の侵入に全土がけがされている際に咲き出た人間美を取りあつたものである。昔日の栄華の影が、消えんとして消えずにいる。一時代を描くにふさはしい筆致を見る可きだ。

マーシアン (Marcian) とバジル (Basil) は、ローマ名門の青年貴族。そしてヴェラニルダとは、異教徒で異民族の皇族の美しさ限りない娘である。話はゴス族の侵略に、ローマ全土が驚愕している時代、——ことに貴族

—————
* *The Unclassed*, Chap. IX:— “Virgil wrote of the founding of Rome; her dissolution is as grand a subject. It would mean years of preparation, and again years in the writing. The sieze and capture of Rome by Alaric—what do you think?”

-- 110 --

の間の騒乱を描いて、はじまる。バジルの姉の手で、ふとした事から、ゴス族の華^{はな}ヴェラニルダが世話される事になる。バジルはこの娘に心をよせ、愛の誓

をしたのも束^{つか}の間のこと。姉とヴェラニルダの姿を見失ってしまった。マーシアンは親友バジルの為に、あらゆる方法を講じて、ヴェラニルダを探索し、バジルも亦この為に狂奔する。見つけ出したマーシアンが、一目見るなりヴェラニルダを思ひつめ、友を裏切ってもと思ひつめる。恋に目を失った彼は、あらぬ偽りをもって、ヴェラニルダをバジルから奪ひとる。ふとこの裏切りを聞き

こんだバジルは、マーシアンの館に急いで、やにはに親友を刺し殺す。ついで、散々にヴェラニルダを面罵し、彼女の純真な告白をも疑ふ。遂にバジルは発狂する。聖ベネディクト僧院に助けられて病を養う身となった。手に渡された聖書から、自己の生涯を反省しはじめる。――

「エホバをおそれその道をあゆむものは皆さいはひなり。そはなんぢおのが手の勤勞をくらふべけければなり。なんぢは福祉を得また安處にをるべし。なんぢの妻は家の奥にをりて、おほくの実をむすぶ葡萄の樹のごとく、汝の子輩はなんぢの筵に圓居して、橄欖の若樹のごとし、視よ、エホバをおそるるものはかく福祉をえん。」（詩篇百二十八）

病も次第に回復し、バジルも亦修道僧の中にまじって、野に出て働く。「はじめて額に汗が玉をなした時、彼は土によごれた手をふきとった。すると、そのちよつとし

-- 111 --

た動作が一何故か知らぬが一彼に喜びを与えた。」（When the first drops of sweat stood upon his forehead he wiped them away with earthly fingers, and the mere action—he knew not why—gave him pleasure.）*バジルは洗礼を受けた。バジルが心わづらふローマ帝国の運命は迫る。汝が心をかける地上の争ひも、やがては神に使へる道ともならう――汝の道を行けと、送り出されて、彼は再びヴェラニルダの手を得た。そして、バジルはどうしたであらう、――我々はしらぬ。作者はここまで書いて死んでしまったのだから。けれども、読者は必ず、しみじみと我が手をみつめるであらう。額に汗することの尊さを思ふであらう。おそらくギッシングは、ライクロフトのやうに、自分の食指に出来たたこをみつめながら、病苦と戦ひながら書きつづけたことであらう。この書が、作者の生涯の恩人、フレデリック・ハンスンの序をつけて、未完のまま世に出たのは1904年。作者はその前年に死んでいる。

年来の願ひであつた歴史小説は未完のままで残したが今一つの宿願は達している。それはドン・キホーテ（Don Quixote）を、原文で読むことであつた。ギリシャ・ラテンの古典から、伊・独・仏に至る彼の語学は、既に早く熟達していたが、スペイン語は、バスク人の国に来てからは

* *Veranilda*, Chap, XXVI

-- 112 --

じめたらしい。1885年、是非よまなければならぬ読み物を列挙して、¹そして次のやうに付言している。——「セルヴァンテス以外は、凡て原書で読めると言へるのは愉快だ。その目的だけに、来年はスペイン語をはじめたいと思っている。」（“I rejoice to say I can read them all in the original, except Cervantes, and I hope to take up Spanish next year, just for that purpose.”）その頃、彼がどんな生活をしていたらう。その望みの達せられたのは、その翌年ならぬ遙か後年の死前一年のことである。しかも、それは、ピレネー山下のバスク人の国である。「生涯自分はこのことがしたかったのだ。そして今遂にその時を得た。私には非常な満足だ」（“All my life I have wanted to do this, and now at last I have found the time. It is a great satisfaction to me.”）²と言ふ言葉は、おそらくギッシングの晩年に見出し得る唯一の歓喜であらう。

人はこの言葉を何と聞くだらう。二十世紀の悪魔は、「金」である。知識の小刀を振りかざして、「金」と戦ったドン・キホーテと、ギッシングを見たい。病床に侍した牧師が、「太陽は凡てのものの上に輝く」（“El sol sal para

¹ *Letters*, p. 161 (Aug. 2, 1885):—“Let us think: Homer, Aeschylus, Sophocles, Euripides, among the Greeks: Virgil, Catullus, Horace, among the Latins: in Italian, Dante and Boccaccio: in Spanish, Don Quixote: in German, Goethe, Jean Paul, Heine: in French, Moliere, George Sand, Balzac, De Musset: in English, Chaucer, Spenser, Shakespeare, Milton, Keats, Browning and Scott. These are indispensable.”

² *Letters*, p. 388 (July 27, 1902)

-- 113 --

todos”)と言ふスペインの格言を聞かせた、¹微笑したと言ふ。けれども、彼が最後に発した言葉は、“Patience, patience”²の二語であった。それもフランス流のアクセントで。看護する者とはなく、生涯の忍従を終へたのは、1903年十二月二十八日。四十六歳と僅か一ヶ月で、ピレネー山下で眠ったのであった。人あって、彼が、二度売春婦を妻とし、最後には妻と別れてフランスの婦人と共に暮らしたことを³罵るならば、私はその人から面をそむけて、彼ギッシングのもとに行かう。

^{1, 2} Cf. *Letters*, p. 398 (Appendix A).

³ Cf. Morley Roberts : *The Private Life of H. Maitland*, Chap. IX

VI. ギッシングの窮乏

ギッシング死して三十年。未だ全集の出たことを知らない。けれども彼の名は屢々引用され、耳にする。ギッシングの読者層は、スウィートンの言ふやうに、大衆でもなければ、小説を芸術的に鑑賞する人々でもない。おそらく彼を支持するのは、小説の中に満たされざる自我意識の表現を求める人々であらう。これを階級的にみるならば、中産階級の、それも下層の人々であらう。知識に於いては下層階級の人々よりもすぐれ、生活能力に於いては上流に入り得ぬ所謂インテリゲンチアの下層の人々である。上と下から板ばさみになって、追いつめられた人々であらう。換言すれば、「漂白の生涯」を送らざるを得なくされている人々である。遂には書物を抱いて、社会の片隅にこぼれ落ちている平安を盗んで生きるより外、行き処のなくなったギッシングを読む人は、現代日本に於いて増加する可き筈である。フランスのすぐれた英文学者は、ギッシング論を次の言葉で結んでいる。――「彼は強烈なしかも他面弱い生活を通して、近代社会思潮の最悪な時代を、何人よりも誠実に表現した人間として残るであらう。」*1930年代の日本が、我国思想史上最も険悪な

* L. Cazamian: *A History of Eng. Lit.*, vol. ii, p. 430; "He will live as the most sincere expression, through his strong and weaker features, of one of the darkest moments in modern social thought."

-- 115 --

時期であるとは、誰もが認める所であらう。知識の殉教者ギッシングの生涯を辿ることは、真に有意義なことであると確信する。けれども、ギッシングその人の窮乏に同情しきって、彼にならって世を白眼視して、独り高くとまって、事終われりとなすのは愚かも甚だしい。その作は読むに苦しく、興味のないものであったにしても、我々は彼ギッシングの窮乏を克服して、彼の窮乏から明日の文学を豊ならしめる方法を求めねばならない。

彼の生涯の悲惨さを言ふものは、先づ十四歳にも達せぬ彼が、父なし子になったことをあげるであらう。更に誰もが、学窓を追はれた事件をあげて、彼の生涯の一大転向とする。そして、ギッシングは貧乏に苦しめられ通した文人であると説いて、筆を擱くのが常である。若し彼がペータの境遇にあったならば――と、人は仮定を設けて、美の殉教者として彼を想像する。けれども今一步深く考えるならば、彼の性来の素質にもその原因があったのではあるまいか。

しかもその性質は、殆どあらゆる知識人に共有のものではあるまいか。

妹エレンが十六歳の頃の彼を描いて、他人がどう思ふかを心配しぬく敏感さをあげ、その性向は生活苦の増加するにつれて、益々激しくなったと記憶していることを、私は先に引用しておいた。更に私は彼が三十三歳の時（1888年）友人 P. と連れ立って旅に出て、パリ滞在中に漏らした言葉を、煩をいとはずに書き抜いてみよう。

-- 116 --

Strange that I, all whose joys and sorrows come from excess of individuality, should be remarkable among men for my yieldingness to everyone and anyone in daily affairs. No man I event met *habitually* sacrifices his own pleasure, habit, intentions to those of a companion, purely out of fear to annoy the latter. It must be a sign of extreme weakness and it makes me the slave of men unspeakably my inferiors. Now here is P. It would take an hour to write down all the things I do and say in one day just to suit his variable moods and temper. Why do I catch a bad cold waiting for him outside a shop where he is purchasing follies?... Not out of affection, most surely, but mere cowardice. I never dare say what I think, for fear of offending him, or causing a misunderstanding. And this has so often been the case in the course of my life. Therefore it is that I am never at peace save when alone....

凡ての喜びも悲しみも個性の過剰から来るやうな私が、日常生活では誰の言ふことでも易々として服する服すると言ふので、人の注意をひいているとは不思議な事だ。他人を苦しめるのが恐ろしいばかりに、連れの人の楽しみ・習慣・意思に、いつでも屈従するなんて言ふ人は見たこともない。それはひどい弱虫の証拠であり、吾身を自分よりはずっと低級な友人の奴隷にすることになるのだ。さて此処に P がいる。彼の色々な気分や気質に合はせようためばかりに、一日の間に私がしたり言ったりしたことを書くには、一時間かかる。彼が馬鹿らしいものを買っている間、店の外で待っていて、何だって風邪なんかひいたのだらう。確かに愛情からし

-- 117 --

た事ぢやなくて、単なる卑屈さからした事だ。彼の機嫌を損じはすまいか、誤解を招きはすまいかとの心配から、決して自分の思っていることを言ったことはない。そしてこれは、自分の生涯を通じて、屢々あった事実なの

だ。それだから、たった独りでいる時以外、決して心安まることがないことになるのだ。¹

おづおづと生きていた彼が、筆を執って、生活の為に書いた小説が何であったか。古典をポケットにしのぼせながら、書かねば生きて行けぬ運命を呪ひながら、「眼」で見て「頭」で書いたのが、彼の小説である。「彼は彼の人物を考へ、そして生けるが如くに明瞭に想起し得るのだ。けれども、決して暖かく発刺たる姿には想起し得なかった。」²彼の作品には思想はあっても、人間が描けている場合は少ない。文体も亦必然的に所謂臭味^{くさみ}たっぷりなものになる。³

彼の第二作が、出版社から何と言つて断られたか。——「スミス・エルダー社は、私の予期した通りのことを、自分の作に対して言つて来た。『劇的な力は多分にあるし、確かに力のない作品ではない。が、我々のみる所では、一般小説の読者を喜ばせるには、余りに痛烈なものであり、ムーディのお得意様が決して心を動かさないやうな

¹ *Letters*, p.227 (Oct. 14, 1888). Diary.

² Swinnerton: *G. Gissing*, p.16

³ Cf. J. Murry: *The problem of Style*, p.48. (Oxford Univ. Press. 1925.)
— “In his work you can actually see inclination at war with destiny, and his style (which was naturally that of the scholar handling general ideas) suffered obviously as a result”

-- 118 --

場面が取り扱つてある。』——だとさ！！勿論、そんなことは、そっくりこっちから言つてやれたことなんだ」¹と言つている。ここにも現はれているやうに、彼の立場は決して読者に対して暖かなものではない。解らない、面白くないのは読者の罪なのであつて、自分の知つたことではないと思つている、と言はれても、ギッシングは否定し得ないであらう。この彼の態度を、彼のみ特有の性癖から来たものとは見られない。性来の傾向であると共に、それを強めたのは知識人に共通の傲慢である。

芸術はある意味で、阿諛である。まして小説は本来物語である。物語は人を興がらせるものである。創作の筆を執りながら、「君、かうしても、読者は怒るまいね？」²と、友にたづねたディッケンズを軽蔑するものは、純芸術の使徒らしく見えて、実はむしろ小説を窮乏に導く人々である。ギッシングこのディッケンズの心境を實によく理解してはいたのだが、実践するだけの心がなかつたのだ。見事な理解は持ちながらも、実践に至り得ないのは、ギッシングのみではあるまい。我々はギッシングが導いてくれるディッケンズの豊かな世界に入

って、明日の日の糧を求めねばならぬ。

¹ *Letters*, p.119 (Sept. 20, 1882).

² Cf. G. Gissing: *Charles Dickens*, p.61 (Casket Library Edition 1926.):
— “Do you think it may be done, without making people angry?”

-- 119 --

Gissing 年表

(特に附記しない限りは、作品は執筆完成の年であって、出版の年は、作品書目にゆづる。)

1857. (安政四年) 十一月二十二日、**Wakefield** に生る。
1870. 父を失ふ。
1871. **Alderly Edge, Chelshire** の **Lindow Grove Boarding School** に入学。
1872. **Manchester** の **Owens College** に入学。
1874. **London** 大学に入学。
1876. 放校—入獄—アメリカ渡航。
1877. 帰英—ロンドン定住。
1879. (明治十二年) *Workers in the Daw*.
1880. 処女作出版。**Frederic Harrison** と相知る。
1882. *Mrs Grundy's Enemies* (出版に至らず)。
1883. *The Unclassed*. **George Meredith** と相知る。
1884. 夏、**Lack District** に遊ぶ。
1885. *Isabel Clarendon*.
A Life's Morning (1888年出版)。
1886. *Demos* (前年十一月より執筆、三月完成)。
始めて海峡を渡る。
1887. *Thyrza* (一月に完成)。
1888. 妻死去。
A Life's Morning 出版。
七月、*The Nether World*.
十月、イタリアに旅立つ。

-- 120 --

1889. 三月、帰英。
The Emancipatee.

- 十一月、ギリシャ旅行。
1890. *New Grub Street*.
1891. 再婚。Exeter 定住。
Born in Exile.
Denzil Quarrier.
1892. *The Odd Women*.
1893. Brixton Road, London へ移転。
1894. *In the Year of jubilee* (四月に完成)。
六月から八月まで Clevedon 滞在。
Eve's Ransom.
八月末、Epsom 定住。
1895. *The Paying Guest*.
Sleeping Fires.
1896. *The Whirlpool*. 既に肺を犯さる。
1897. 二月より South Devon に三ヶ月滞在。
The Town Traveller.
九月、イオニアの海辺に旅立つ。
Siena 滞在中に *Charles Dickens* 執筆。
1898. 四月、ローマを出発して、ドイツに寄って帰国。
Dorking に住む。
The Crown of Life (翌年一月完成)。
1899. 肺を病んで、巴里に転居。
この間に *By the Ionian Sea* を執筆し始む。
1900. St. Honorè les Bains に転居。
Our fiend the Charlatan.

-- 121 --

1901. Paris – Suffolk – Autun – Arcachon.
Forster's Life of Charles Dickens の縮小を企つ (翌年一月完成)。
1902. 四月に St. Jean de Luz に定住。
The Private Papers of Henry Ryecroft を *Fortnightly Review* に連載。
- 1903 (明治三十六年). *Will Warburton*.
十二月二十八日、St. Jean de Luz にて死去。

Saint-Honoré-Les-Bain, Autun 共にフランス中央部の町で、前者は陶器製造と温泉で名高く、後者はローマの古跡や寺院で名がある。Arcachon, St. Jean de Luz は共にフランスの避寒地及び海水浴場として有名である。

-- 122 --

<空白>

-- 123 --

GISSING 作品及び参考書目

I. 作品

(出版年度順に挙げ、再版以後は筆者の眼にし得たものだけをあげる。)

- ¹. *Workers in the Dawn*. 3 vols. 1880.
- ². *The Unclassed*. 3 vols. 1884; 1 vol. 1895. Lawrence and Bullen. この評伝の引用には、1985年の1冊本を使用した。作者自身の“Preface of the New Edition”が一頁ついていて、多少の改訂が加へられている。“Revising this early effort, the author has been glad to run his pen through superfluous pages, and to obliterate certain traces of the impertinent Ego.” —と作者が自らいっているこの版が、むしろ読み答へがあると言へる。
- ³. *Isable Clarendon*. 2 vols. 1886.
- ⁴. *Demos*. 3 vols. 1886.

G. R. G と署名して出版したのは、この作かららしい。色々な版があるが、下記の版を挙げる。

Demos; A Story of English Socialism By George Gissing. With an Introduction by Morley Roberts.

1928. Eveleigh Nash & Grayson. 以下屢々 Morley Roberts の序のついている版をあげるのは、執筆当時の Gissing をのべているので興味があるし、印刷も見事なものであるからである。

--124--

- ⁵. *Thyrza*. 3 vols. 1887. 1927年に Morley Roberts が Introduction をつけて、一冊物を Eveleigh Nash and Grayson から出している。
- ⁶. *A Life's Morning*. 3 vols. 1888: 1 vol. With an Introduction By Morley Roberts. 1928. Eveleigh Nash and Grayson. 尚、この作には Cheap Ed. が沢山ある。手頃なものには John Murray のものが、軽いこの作を読みにはふさはしいものであらう。
- ⁷. *The Nether World*. 3 vols. 1889; 1 vol. With an Introduction By Morley Roberts. 1928. Eveleigh Nash and Grayson.
- ⁸. *The Emancipated*. 3 vols. 1890. Richard Bentley and Son.
- ⁹. *New Grub Street*. 3 vols. 1891. 1 vol. With an Introduction By Morley

Roberts. 1927. Eveleigh Nash and Grayson. 尚 Modern Library (1926)に、Harry Hansenと言ふ人の見事な序文がついて入っている。

- ¹⁰. *Born in Exile*. 3 vols. 1892. Adam and Charles Bullen.
- ¹¹. Denzil Quarrier. 3 vols. 1892.
- ¹². *The Odd Women*. 3 vols. 1893. 1 vol. 1905. A.H Bullen.
- ¹³. *In the Year of Jubilee*. 3 vols. 1 vol. 1984. Lawrence and Bullen.
- ¹⁴. *The Payongs Guest*. 1 vol. 1895. Casselle's

povlet

--125--

Library

- ¹⁵. *Sleeping Fires*. 1 vol. 1895. Autonym Library. T. Fisher Unwin. 同じ出版所から、1972年 Unwin's Cabinet Libraryの一つとして出版されている。尚下記の版は序文に事実の誤が少しあるが附記しておく。織田正信編、昭和五年九月、北星堂(80 sen)。
- ¹⁶. *Even's Ransom*. 1 vol. 1895. Lawence & Bullen.
- ¹⁷. *The Whirlpool*. 1 vol. 1897. Lawence & Bullen.
- ¹⁸. *Human Odds and Ends*. 1 vol. 1898. この作は“Stories and Sketches”であって、短篇集としては最初のものである。1915年 Sidgwick & Jacksonから出版になったものが、容易に手に入るであらう。
- ¹⁹. *Charles Dickens: A Critical Study*. 1 vol. 1898. もっとも簡便な版は **Casket Library Edition (1929. Blackie and son.)** であらう。けれども正確なものは次の一書であらう。

G. Gissing: *The Immortal Dickens*. With an Introduction by B.W. Matz. Cecil Palmer.

- ²⁰. *The Town Traveller*. 1 vol. 1898. この書には種々な版があるが、気軽によめる手軽な Thomas Nelson and son の版が良い。
- ²¹. *The Crown of Life*. 1 vol. 1899. Methuen & co.
- ²². *Our Friend the Charlatan*. 1 vol. 1901. Chapman & Hall.
- ²³. *By the Ionian Sea ; Notes of a Ramble in southern*

--126--

Italy. 1 vol. 1901. 色々な版があるが、最も容易に手に入るのは、**1917年 Chapman and Hall** から出た **Pocket Edition** であらう。諸般は **Crown 4 to.** で挿絵が入っている。

- ²⁴. *Forster's Life of Dickens*. Abridged and revised by G. Gissing. 1903. Chapman and Hall.
- ²⁵. *The Private Papers of Henry Ryecroft*. 1 vol. 1903. 実に様々な版画あ

るが、英文学叢書に市河博士の編纂されたものがある。藤野滋氏の名訳と併読すれば十二分である。この作の Modern Librarian Ed. には Paul Elmer More の要を得た Gissing 論が巻頭にある。

- ²⁶. *Veranilda*. 1 vol. 1904. この未完の作は、作者の死後 Frederic Harrison の序をつけて、Archibald Constable から出版。1929 年 The World's Classics の中に加へられた。けれども情味豊かな Harrison の序文は入っていない。
- ²⁷. *Will Warburton*. 1 Vol. 1905. A Constable & Co. この作も The World's Classics の中(1929)入っているから容易に手に入る。
- ²⁸ *The House of cobwebs*. 1 vol. 1906. 短篇集。Thomas Seccombe の “The Works of George Gissing: An Introductory Survey” が附いている、この論は部分的にはすぐれた鑑賞眼をしめしてはいるが、首肯し難い点が多い。今日から見れば、事実の誤りも多い。在来日本で読まれた Gissing の短篇は主としてこれに従ったものである。前期の *Humman*

--127--

Odds and Ends に入っていないものを集めたのは、言ふまでもあるまい。Gissing の短篇の選集としては、下記のをすすめたい。

G. Gissing: *Short Stories*. Short Stories of To-day and Yesterday. 1929. George. G. Harrap and Co.

- ²⁹. *A Victim of Circumstances and Other Stories*. 1 vol. 1927. Constable & Co. A. C. Gissing の序文がついている。前記二冊の短篇集に入っていないものを集めたのではあるが、傑作が多い。研究社小英文学叢書の中に、久野朔郎氏の手で、この中から抜萃した三作の註がある。
- ³⁰. *Letters of George Gissing to Members of his family*. 参考書目(2)を参照。

尚、アメリカ時代の作を集めたものは本文中の、脚註に記すだけにとどめる。Dickens については The Rochester Deckens に Introduction を書き(1900, etc.) New York の *Critic* 誌上に 1902 (Jan.) に “Dickens in Memory” と言ふ論文をよせている。私は見たことはないが、“Homes and Haunts of Famous Authors” という叢書にも *Dickens* を書いて(1906)いる。

II 参考書目

(大体、初学者が手にするのに適当と思はれる順序に配列した。)

- ¹. Frank Swinnerton: *George Gissing: A Critical*

--128--

Study. 1924. Martin Secker. Swinnerton 自身がすぐれた作家であるので、作家にして始めて言ひ得るやうな卓抜な批評が聞かれるが、一面偏見もある。伝記と作品の筋が書いてあるから、最も好い入門書として挙げ得る。けれども伝記上の事実に至っては、この書出版後に世に出た次に記す書簡集に依ることが、最も安全であらう。

- ². *Letters of George Gissing to Members of his Family*. Collected and arranged by Algeron and Ellen Gissing. 1927. Constable. Gissing の書簡のみならず、日記をも加へ、且つ諸所に編者の註が入っている。弟 William の手紙やその他、Gissing の生活を知る上に必要な文が挿入してある。三つ Appendix があって、――

A. —— **An extract from a letter to Gissing's Sisters' by the Rev. Theodore Cooper, the English Chaplain at St. Jean de Luz.**

B. —— **Extract from *The Times* of December 29, 1903.**

C. —— 妹 **Ellen** の追憶文。

若し私の評伝に多少とも見る可きものがあるとすれば、この **Letters** によって検討した点のみであらう。

- ³. A.C.Gissing: *Selections, Autobiographical and Imaginative, from the Works of George Gissing*. With an Introduction by Virginia Woolf. 1929. Jonathan Cape. 作品の抜萃を列举し、その間に作者当時の

--129--

心境を簡単に附加しているが、このままでは読み通せないであらう。作品を読む際の参考にはなる。**Woolf** の序について、**A.C.Gissing** の **Preface** があるが、たいしたものではない。短い詩や散文などが入っているのは、全集のない **Gissing** のことであるから大変に役に立つ。

- ⁴. Morley Roberts: *The Private Life of Henry Mairland*. New and revised Ed. 1923. Eveleigh Nash and Grayson. Henry Maitland とは George Gissing のことである。この書は、他人の生活をそつとのぞいたやうな不愉快な点があるし、現存の人に迷惑をかけまいためか殆ど凡って変名になっている。二三例をあげれば、――Frederic Harrison—Harold Edgeworth; John Morley—John Harley; H.G.Wells—G.H. Rivers. 等である。Gissing の私生活を知るには、気持の悪い本ではあるが、必要なものだ。

- ⁵. W.T.Young: "Geouge Gissing" (*The Cambridge History of Eng. Lit.*, vol X III, chap. X I V.)

- ⁶. May Yates: *George Gissing: An Appreciation*. 1922. Published by the University of Manchester at the University Press. 非常に細かい研究ではあるが、いささか全般に互る論旨が一貫してない憾みはあるが、Swinnerton のものを読んだ後に是非一読をすすめる。

以下大体発表年代順に列举しよう。雑誌に発表にな

ったものは、容易に手に入らないし、書簡集発表後の今日では、事実上の誤りも多いから列挙しないことにする。

⁷. J. W. Cunliffe: "George Gissing" (*English Literature during the Last Half Century.*) 1922. New York: Macmillan.

⁸. Madeleine L. Cazamian: "G. Gissing" (*Le Roman et les idées en Angleterre: L' influence de la science, 1860-1890.* 1923. Publication de la Faculté des Lettres de L' Université de Strasbourg. Fascicule 15.) 1875 から 1900 にかけての Pessimism の小説的表現を、Gissing と Hardy に求めた卓抜な評論である。Chap. V. (pp. 302-371) 全部を Gissing にさき、他にその比を見ない好論文である。

⁹. A. Weber: *G. Gissing und die sozial Frage.* Beitr. Zur engl. Philologie X X. 1933. Tauchnitz. 私は未だこの書を手にし得ないが、多くの期待を持っている。この方面から Gissing を論じたものは、私の知っている限りでは皆無であるから。そしてかかる立場からみるのが、今後の Gissing 研究の当然取る可き傾向であらう。

¹⁰. Thomas Seccombe: "The Work of G. Gissing" (*An Introductory Survey to The House of Cobwebs.*) 作品書目(28)を見よ。

¹¹. Thomas Seccombe: "George Gissing" (*Dictionary of National Biography, supp. 2, vol. ii*)

次に **Gissing** に触れ、見る可き見解を示している文学史的の著述の署名と頁数を附記しておかう。

¹². E. Legouis & L. Cazamian: *A History of Eng. Lit.*, vol ii, pp. 428-430.

その書き出しが、"Nothing is more instructive than to compare Gissing with Dickens." とあるやうに、両者を比較した簡潔な名論文。

¹³. Harold Williams: *Modern English Writers*, pp. 312-317. 1925. 3rd. Ed. Sidgwick & Jackson.

¹⁴. Hugh Walker: *The Literature of the Victorian Age.* 1921. Cambridge University Press. Gissing を論じたのは pp. 814-15 であるが、Dickens を論ずる際に、Gissing の評論を引用しつつ Gissing の本質に及んでいる。

⁹. の A. Weber の研究をこの書の校正中に入手した。詳細な研究書目があり、300 頁に及ぶ時代思潮から見て充分な検討を行った面白いものらしい。何れ紹介の機を得たいものと思っている。

-- 132 --

<空白>

-- 133 --

INDEX

(年表及び書目を省く。又地名、作中人物の名、作品の掲載された雑誌名は掲げず、脚註のみに出たものは重要なものだけを記した。ギッシング自身については、殆ど年代順に叙述したのであるから特に記さなかった。)

A

Aristophanes, 63
Arnold, Matthew, 27n.

B

Beardsley, Aubrey, 66
Bertz, Edouard, 14, 92
Born in Exile, 38, 51, 73-79, 81
Brownie, 12n., 14n.
Burns, Roberts, 13
Byron, George Gordon, 88n.
By the Ionian Sea, 92, 94-95, 97

C

Carlyle, Thomas, 32
Cazamian, L., 114n.
Cervantes, Saavedra Miguel de,
112
Chatterton, Thomas, 5
Chavannes, Puvis de, 52
Chesterton, G.K., 92
Christmas on the Capitol, 61n
Comte, Auguste, 18, 20, 27, 30
Crown of Life. The, 93

--134--

Gissing, Ellen. 2n., 6, 8, 115
Gissing, Thomas Waller, 6
Gissing, William, 14n., 16-17, 88
Gladstone, W. E, 17, 37
Godwin, William, 73
Goethe, J. Wolfgang von, 60

H

Hardy, Thomas, 40., 79, 86

D

Darwin, Charles, 3
Demos, 39,40,42-45, 56n
Denzil Quarrier, 80
Dickens, Charles, 6, 21, 23, 28, 35,
50, 69n., 92, 105-106, 118
Dickens, Charles, 92, 106, 118n.
Dickens, Charles, Life of, 106
Don Quixote, 111-12

E

Emancipated, The, 62
*Enquiry Concerning Political
Justice*, 73
Eve's Ransom, 84-85

F

Forster, John, 106

G

Gissing, A. C., 2n.
Gissing, Algernon, 2n., 6

I

In the Year of Jubilee, 82-83
Imitatio Christi, 104

Isabel Clarendon, 38, 39-40

J

Johnson, Samuel, 69, 102

Jude the Obscure, 79

K

Keats, John, 93

L

Latter-day Pamphlets, 32

Lawrence, D. H., 5, 64

Life's Morning. A, 38, 39n., 40n.,
50-52, 58

M

Meredith, George, 35, 39, 40, 42,
51, 86-87

Moore, George, 4

Morley, John, 27, 45n.

Morris, William, 34, 40-42

Mrs. Grundy's Enemies, 31

Murry, J. M., 117n

--135--

Roberts, Morley, 8, 9, 10, 12n., 24,
25, 65, 78n., 113n.

Rossetti, D.G., 36n.

Ruskin, John, 32, 34, 39

S

Scott, Walter, 58

Shakespeare, William, 93n.

N

Nether World, The, 52-58, 59, 73,
81

New Grub Street, 10, 25n., 38, 64,
66-72, 73, 81, 96

Nocturne, 46, 50

O

Odd Women, The, 80-81

Old Curiosity Shop, The, 6

Ordeal of Richard Feverel, The, 51

Our Friend the Charlatan, 96-97,
105

P

Pater, Walter, 12, 115

Paying Guest, The, 89, 90

Private Papers of Henry Ryecroft,
The, 5, 14, 29n., 30, 33, 78, 82n.,
97-104, 105, 106, 108

R

Renan, Ernest, 53

Sins of Fathers, 12n

Slipping Fires, 63n., 89, 90-91

Spencer, Herbert, 18

Swinnerton, Frank, 14, 23n., 38.,
46, 50, 79, 90n., 91, 114, 117n.

T

Tennyson, Alfred, 92

Thackeray, William Makepeace,
23, 58
Thyrza, 45-50
Town Traveller, The, 89
Turgenieff, Ivan Sergeievich, 28

U

Unclassed, The, 25n., 35-38, 86,
109
Unto This Last, 32

V

Veranilda, 19n, 27n., 89, 92, 105,
108-111

W

Wells, H.G., 9
Whirlpool, The, 88, 91
Wilde, Oscar, 66
Will Warburton, 107-108
Woolf, Virginia, 2, 3
Workers in the Dawn, 13, 14,
22-24

X

Xenophon, 63

Z

Zola, Émile, 57

この電子化は、名古屋大学大学院国際言語文化研究科・国際多元文化専攻・先端文化論講座・博士後期課程 3 年の松浦由美子氏および博士前期課程 2 年の葛西裕仁氏とのコラボレーションによって製作された。ウェブ上での公開は平成 19 年 3 月 1 日。ファイル形式は **PDF** で、閲覧およびプリントアウトは可能だが、改変およびコピー&ペーストはできない。

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 松岡光治

052-789-4864

mitsu@lang.nagoya-u.ac.jp

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/>